
狂犬王子にお仕えしています。

河の上リン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂犬王子にお仕えしています。

【Nコード】

N5749Z

【作者名】

河の上リン

【あらすじ】

突然見ず知らずの男たちに拉致されて、気づけばガルダム国の第6王子、ゼイル様にお仕えすることになったあたし。この王子、世間では、病弱で滅多に国政に顔を見せない麗しの幻影王子として名高いんだけど、実は国王直属の秘密組織『狂犬』の若きリーダー。しかもDSで最凶最悪の魔王みたいな男だったのだ。なんでか分からないけど気に入られたあたしは、王子付き専属メイド兼狂犬のメンバーとして、日々奮闘する羽目に…。

ワニ池での攻防（前書き）

思いつきではじめました。どうなるか分かりませんが、よかったら見てやってください。

ワニ池での攻防

神様。一つお尋ねします。

もしもこの世界に本当にあなたがいるのなら。

私は一体どんな罪を犯したのでしょうか。

教えてください。

どうして、私にこんな試練をおあたえになるのか。

…。
どうして私はあんな、あんなドS王子の部下になったのでしょうか

っというか、あたしに何の恨みがあるんですか！?!?!?

あたしは神様への呪いの言葉を胸に刻みながら、必死に逃げ回る。
ここは水の中。後ろにはぱっくり口を開けたワニ。
そして極め付け。

あたしは泳げない。

「いやあああああ

っ！！！！！！」

なんで、なんであいつら、陸の上では人の足には敵わないのに、水の中だとあんなに早いんだ！！！！ものすごいスピードで、あたしを平らげようと常にお口は準備万端状態。

そしてあたしはまさかの難易度高い着衣水泳。かといってここで泳げないからといって諦めれば、あたしの末路は溺れたところをワニに食べられるか、もしくは溺れる前にワニのおなかの中かどちらかだ。

「もお いや！！！！こんちくしょう！！！！」

だから必死で手も足も体全体も使ってがむしゃらに逃げ惑う。しかし、本当に呪いたいのはこの状況でも、ワニでも、実は神様でもない。

「おいテイ！！逃げ回ってないで、さっさと例のブツ探せ」

池のふちで優雅にタバコなんぞ吸っている、あの最低最悪男だ！！

あいつ、泳げないと知っていないながらあたしを池にたたき落とし（しかもワニがいるって知ってるくせに）、あまつさえ池のどこかにあると思われるある証拠品を取って来いって命令したのだ。

「ちょ、ゼイル様、無理ですって無理無理無理…わっぷ」

勢い余って水が喉の奥まで入り込む。が、そんなあたしのある意味命を懸けた訴えにも、彼は耳を貸してはくれなかった。

「無理？んな言葉、俺の辞書には載ってねえから」

じゃああんたがやれ！！なんて言えないあたし…。彼の下についてもう長いこと経つけど。あの鬼畜で悪魔みたいな男は、決して助けはくれない。ならば、自分の命は自分で守るしかない！

幸い水での動きもつかめてきたので、あたしは拙い泳ぎをしながら必死に打開策を考える。

問題はあのワニだ。あいつさえいなくなれば、まだ勝算はある。

あたしは犬かきをしながら辺りを見渡す。個人の所有する池にしては広い方で、綺麗な睡蓮も浮いていれば水草も漂い、飛び石なんかもおいてある風情な作りだ。それを見たあたしはふと、あることを思いついた。

ふむ、いけるかもしれない。

あたしはその中でも一番大きな石に目を付ける。あれをあれしてあれすればあれにならないだろうか。ええい、考えてる暇はない！あたしはスピードをあげると、困めばあたしの腕、ふたまわり分はありそうなその岩をを目指す。

そしてなんとかそこまで辿り着くとその石にしがみついた。それから乱れた呼吸と疲労した表情をあえて顔に張り付け、ワニの方を見た。

彼（彼女かもしれないけど）は疲れ切ったあたしを見てわずかにほくそ笑む（かどつかは分かんないけど、少なくともそんな風にあたしは見えた）と、スピードを落とし、ゆっくりと近づいてくる。あたしはそこから動かない。ワニの目がきらりと光った。

その姿はもろに、弱っている獲物をじわりと追い詰める肉食動物そのもの。ようやくご飯にありつける…そんな彼の思いが伝わってくる。

そしてそのままの速度でぐんぐんやってきて、大きく開いた口を更に大きく広げ、あたしの体ごと丸のみにしようと覆いかぶさって…今だ！その瞬間、あたしは電光石火の速さで石から離れる。

直後、ガリツという固い音が辺りに響いた。間一髪、あたしはワニの恐怖の一口から逃れる。あの音から察するに……見ると、ワニが岩を食べている状態。

「ふう、よかった成功した」

もちろん、そうなるように仕向けたんだけど。あたしを丸のみしようと限界まで口をあけて襲い掛かり、案の定あのワニ、岩が喉まではいりこんで抜けられないらしい。頑張ってジタバタしてるけど、びくともしない。顎も外れてそうだ。

この隙にとあたしは腰にさした刃物を鞘ごと引っこ抜く。刃は出さない。あの長官と違って罪もない生き物を叩き斬る趣味はないし。ではどうするかという。あたしは水中で必死に足をもがかせながら鞘を付けたままワニの方に近寄ると、その無防備な頭に思いっきり手にしたそれを叩きつけた。

「どっじゃ　　！！！！」

鈍い音がして。見事にヒットしたあたしの武器で頭をやられたワニは、そのままの格好で気絶する。

「……………とりあえず、助かった」

ほんと、九死に一生ってこのことなんじゃないのかな、うん。

さて。それで本題はここからだ。あたしはこの水の中で、あるブツを見つけないとならない。早くしないとワニが起きちゃうし、かといって上司は…あ、茶飲んでる。

絶対手伝ってくれる気皆無だ。分かってたことだけだ。

あたしは手にした武器を腰に差そうと（またワニが襲って来た時ように持つかないと不安だ）…つもりがささらず、そのまま落下していくあたしの武器。

「!?!?やば」

慌てて水に顔を付けるとあとを追う。重みでどんどん下まで落ちて行き、ついには最下部に辿り着いた。水は綺麗だから視界もよく、すぐに落とされた刀を見つけることができた。そんなに深くなくてよかった。

今度はきちんと腰にしまうと、あたしは上にかかるうと…ん？

目の前にはあのワニがくっついていて石。その石の一番下に、なにやら怪しげな物体がくくりつけられている。明らかに人工物だ。急いで近づくと、縛ってあった紐を刀で切る。

それは長方形の真っ黒な箱、だった。

これは…もしかしてもしかしなくとも、あれなんじゃないのか？必

死に探し求めていた、例のブツ。そんなに重くないので、あたしはそれを手にしたまま上に上がる。荷物を抱え、短期間でマスターした犬かきを駆使し、そしての男のところに戻ると、どすんと彼の足もとにそれを置いた。

「王子、おそらくこれじゃないでしょうか？」

うー、しかし寒い。水の中にいたらそうでもなかったけど、陸に上がると風が身にしみる。だって季節は10月も終わり。秋風がビュービュー吹き荒れる頃合いだ。寒さに凍えながらあたしが着ていた服を絞っていると、なんともおもしろくなさそうな顔で御仁がぼやいた。

「なんだ、もう見つけたのか。つまんねえな」

「いや、なんでつまらないんですか。っていうかあれ以上あそこにいたら、あたし生きて戻れないですって」

「慈悲で助けたワニが復活して、もうーラウンドって思ってたんだがな」

そう言つてクククともろ悪人顔で笑う。なんだその笑い、完全に黒い笑み…って以前に、全く王子っぽくないんですけど。

「あたしを殺す気ですか!？」

「大丈夫だ。いざとなれば助けに行つたさ。多分」

「多分って絶対その気ないですよね…ってそれよりどうします?これ力ギ付いてますけど」

薄情な王子のことはひとまずおいといて。あたしが命がけで持ってきたこいつには、頑丈そうかつ複雑そうな鍵が二つも付いている。しかし王子は何ともなしにしれつと言い放った。

「え、もう開けたけど」

そして彼がカギを持ちあげた瞬間、パーンと鍵がはじけ飛んだ。

「はや!?!」

なんだその早開けの技術。一介の王子が、強盗でも生業にしてたんですかってくらいの腕前だ。

「お前がちんたら陸に上がってる間にとうに壊した」

その手には細長い針金が。成程、ピッキングか。仕事が早いことで。

「さて、それじゃあ中身を拝見するか」

もはやただの箱と化したそれを、王子は乱暴にばんと開け放った。

あたしも興味シンシンで覗きこむ。すると中には…

「やっぱりな」

そこのは、あたしたちが探し求めていたものと、そしてなぜか大量の女物の下着が入っていたのだった。

ワニ事件報告…(1)(前書き)

時代背景とかはごちゃごちゃですが、あんまり気にしないでください
い…

ワニ事件報告…(1)

「それで、あの男は自白したのか？」

ここは、ガルダム王国のサイド城最上部にある、とあるお部屋。中は豪華絢爛で、西国から渡って来た装飾品やら置物で彩られている。そんなお部屋の、大きな窓の前に。

大きな長机に両手を組み、あたしたちを見つめる一人のお方の姿があった。

険しい顔つきであたしたちを見据える彼こそ、この強大で巨大なガルダム王国のピラミッドの頂点に君臨する、ザイレン王である。

彼は一昨日起こった『ドミンゴ伯爵麻薬所持容疑』（別名：ワニ事件）の報告に来たあたしたちの話の黙って聞いた後、そう言った。

するとあたしの前に立つゼイル王子はにやりと笑みを浮かべながら言い放った。

「ええ、もちろん。ぺらぺら全部話してくれてますよ。あれじゃあ黒幕に辿り着くのも時間の問題かと」

すると、歴代の王の中でも一番厳格だとして知られるあの王様の顔に、珍しく笑みが浮かんだ。

「さすがは『黒い狂犬』。狙った獲物は逃がさないな。一体どんな手を使って、自分の非を認めようとしなかった頑固者を口説き落とすか？」

「いやいや、それほどでも。俺は何もしちゃいないですよ。あの男が自発的に、勝手にしゃべってくれてるだけですから」

しれっとそう言う王子に、あたしは思わずツッコミをいれそうになる。

…世間ではあれを、脅迫と呼ぶんですよ、と。

まあそれにしあって、ゼイル王子の取り調べは見事だった。

麻薬を購入している疑いの掛けられた、ドミンゴ伯爵。しかしその実際のブツが彼の屋敷で押収されて尚、しらをきり、自分の罪を決して認めようとしなかった。そんな彼のいる部屋にやって来たゼイル王子。

あきらかに堅気でない雰囲気をつんぷんさせ、くわえ煙草で入って来た彼は伯爵の正面に座ると、開口一番こう切り出した。

「お前の庭の池から、ブツが押収された。いい加減罪を認めたらどうだ」

しかし当の伯爵は、目の前に「狂犬」と呼ばれる組織のトップが相手と知っていながらも、顔をふいと不愉快そうにそむけ強気な口調で、

「ふん！それがどうした。わしの屋敷にあったからといって、それがわしの者とは限るまい。屋敷で働くメイドや庭師の可能性もあるだろうよ」

なんでメイドや庭師があんな危険極まりないワニ池に、麻薬なんて

隠す。んな命の危険犯さなくたって、別の選択肢があるだろうが。

「だがあの池にはワニがいた。あんたにしかたつかない、非常に凶暴なワニだ。そんなところに果たしてお前以外の者が隠せるか？」

「そんなことわしの知ったことではないわい！現に隠せているではないか。わしではないがな」

こうやって、わしじゃないの一点張り。さすがにあたしたちもお手上げ状態だったんだけど…。

すると王子はふうと息を吐くと、こういう場ではあまり見せたことのない、柔らかな微笑みを浮かべて伯爵を見た。

そして次の瞬間、彼の口からとんでもない言葉が飛び出した。

「分かりました。ではお帰りいただいて結構です」

「!?!?!?!?!」

え、いや、だって、どう考えたってこのおっさんが犯人じゃない！？なのに本人が認めていないからといって、あっさり逃がしちゃうの!?!?

脇で見ていたあたしは慌てふためくけど、王子は全く動じず笑顔のままだ。

当の伯爵もこの発言に少し驚いたのか（自分で無実だって言い張ってたくせに）戸惑いの顔を見せていたけど、彼の言葉が本物と分かれると鼻息荒くふん、と言った後その場から立ち上がった。

「分かればいいんじゃない、分かれば。じゃあわしは本当に帰るから

な

「ええどうぞ。お気をつけて」

そして伯爵が足を踏み出そうとした瞬間、王子は「ああそう言えば」と言葉を切りだした。

「昨日見つかった箱の中には、麻薬のほかに女性用の下着がいくつも見つかった。しかもどれも使用済み」

「……!？」

「見つかりたくないもの、っていうことで、麻薬とその下着を誰にも見つからないだろう場所に隠したんだろうが。人の趣味にとやかく言いつもりはないが、まさか天下のドミント伯爵が下着泥棒的な趣味をお持ちだったとは驚きです」

「待て、わたしにはそんな趣味はないぞ？」

「失礼。では自分でつけて楽しむ性癖をお持ちだったとは」

「黙れ、どっちも違うと言っているだろう!!おのれ若造の分際でわたしに意見するつもりか!？」

顔を紅潮させてゼイル王子の胸元を掴む。あたしが止めに入ろうとすると、王子はそれを手で制した。それからなんともない口調で言葉が続ける。

「いえそんな滅相もない。まあ別に伯爵にそんな趣味があるうと罪になる訳じゃないし、今回の事件にもなんら関係がない。ただ、伯爵にそんな趣味があると、俺もどこかでぼろっと言ってしまっつかもしれない。例えば行きつけの花街のなじみの女とか。近くの茶屋で働く女の子とかに。そして人の噂話とは早いもの。いくらこっちが口止めしてても必ず外部に漏れる。しかもはじめより大きくなって世間に広まると言うのが世の常」

「違つと言っているだろうが！！わしが誰だか分かつて言ってるんだろうな！？もしもそんなことをしてみる！！ただじゃおかないからな！！」

しかし全く臆す様子なく、ゼイル王子はひょいと肩をすくめた。

「どうぞお好きに。だがいくら俺に報復したところで噂が消えることはない。下着を付ける、もしくは盗む趣味がある変態親父、っていう噂があつた事実は消えないし、これから先一生変態呼ばわりされるんじゃないのか？」

「ぐぬぬぬぬぬ」

「俺には耐えられないね。世間に変態のレッテルを貼られて生きて行くのは。白い目で見られえて、後ろ指さされて、あーあ、かわいそうに！！」

「……………」

「麻薬をやつてて捕まりました、っていうのと、そういう変態的趣味の男……。おいテイ。お前ならどっちが嫌か？」

唐突に話を振られて、あたしは思わず体をびくつとさせる。え、えと、どっちが嫌かって？うーん、麻薬をしているっていうのは犯罪だし、もちろん許されないことなんだけど。でも正直、

「生理的に受け付けけないのは後者です」

瞬間、伯爵の目がかつと大きく見開かれる。驚愕、ショックっていう感じ。反面、王子は目であたしに、「よく言った」って言っている感じがする。

それからゼイル王子は、再びにっこり笑った。さっきと同じ優しい顔。いやでも、違つ。これはいい笑顔だ。

他人を追い詰めたときに見せる、有無を言わさない裏ありまくりの、いつもの王子らしい邪悪な微笑みだった。

「お引き留めしてしまって失礼。どうぞお引き取りください」

その瞬間、伯爵は手に入れていた力を抜き、その場にへなへなと崩れ落ちた。

伯爵が全てをぶちまける方を選んだのは、当然である。

つまり、自分の変態的性癖を世間に公表しない代わりに、麻薬のこととは認め、知っていることは全て話すと。

しかし正直あんな取り調べ、彼にしかできないことだと思う。あの脅迫のやり方は、本当にすごかった。確実に相手を追い詰める手法は、さすが狂犬のトップ。

あたしはあの時思ったもん。この男、絶対に敵に回したくないって。

ワニ事件報告…(2)

「しかしこれで事は進展しそうだな。お前のおかげだ」

「お褒めいただき光栄です」

すると王様は、今度はあたしの方に向き直ると、

「ゼイルに聞いたぞ。今回、よく頑張ったそうじゃないか。なんでモワニのいる危険な池に自ら飛び込み、証拠品を探し出したのか」

「!?は、はい」

自ら、って部分はまったくもって違うけど（かといって訂正しにくいし）、それ以外は大体当たっている（っていうか、有無を言わせない圧力に負けたただけだけど…）。

すると国王はにこりと笑いかけた。

「その勇気は、素晴らしい！お前のような者がいて私は誇りに思う。これからも全力を尽くして頑張ってほしい」

「あ、あ、ありがとうございます！！若輩ですが、頑張ります！！」

まさか、まさか王様直々にお褒めの言葉をいただくなんて…！？こんなこと、滅多にあるもんじゃない！！あん時頑張ってよかった！あたしはその場で床につきそうな勢いで頭を下げる。

「この一件、引き続きゼイルに任せる。必ず黒幕を突き止めるんだ」
「了解しました。必ず」

あたしたちは佇まいをただし、敬礼をする。そうだ、これで事件は

終わりじゃない。目的は、あの麻薬をばらまいた張本人を捕まえることなんだから。

王様からありがたいお言葉をいただいたあたしたちは、失礼します、と頭を下げ、部屋を出る時に再び礼をしてから扉をぱたんと閉じた。

すると。その瞬間、ゼイル王子の纏う雰囲気ガラリと変わった。

さっきまでは、触れれば切れそうな鋭い、それでいて邪悪さを漂わせるオーラで、ニヒルな笑いか浮かべていた完全に悪役のボス、みたいだったのに。

今あたしの目の前にいるそのお姿は、まるで真逆だ。

もともととお美しいその顔には柔和な笑みを浮かべ、どことなく儂げでかよわい、それでいて繊細さも持ち合わせたその姿は、まぎれもなく国民に愛されてやまない『ゼイル王子（営業用）』だった。

「相変わらずその切り替えの早さ…すごいを通り越して気持ち悪いです」

「酷いことを言うな。…お前、後でシメル」

「いやいやいやそんな、嘘ですすみませんごめんなさい！！！」

やば、つい本音で気持ち悪いって言ってしまった！？あたしは機嫌をやや損ねてしまった主に慌てて頭を下げる。すると王子はにっこりと笑って

「冗談だから気にするな」

その瞬間、あたしたちの横をうっとりとした表情でメイドが通り過

ぎた。彼女がいなくなり、廊下に元の静けさが戻るや否や、その笑顔のまま小さな声で、どすをきかせてゼイル王子が呟いた。

「もういっぺんワニ池に沈めるぞ」

「!?!」

そう言い残して、ぶるぶる恐怖に震えているあたしをおいてさっさと先に進んでいく。

「あ、待ってください!?!」

おいて行かれる訳にはいかない。あたしはあの王子の王子付き従者なんだから!!

慌ててあたしは主の後を追って駆け足でついていった。

拉致された(1) (前書き)

そもそものお話。

拉致された(1)

あたし、ことテスタロッサがゼイル王子に出会ったのは、今から1年前のことである。

場所はあたしのような庶民には一生足を踏み入れる機会がないはずの、白亜城と全世界的に名高い、ガルダムのお城のとある一室だった。

「ふぬぬぬんうぬぬ

……!!!」

叫べば叫ぶほど、口が閉まる。苦しい。だけどそんなことに構っている場合じゃない!!

必死に体をもがくけど、後ろ手に縛られた縄をほどけそうもない。足の方も同様だ。口には猿轡をはめられてる。

「ぶぶをううう!!!!」

「こら、大人しくしろ!?!」

黒づくめのお兄さんにより、こんな身動きできない状態のあたしに更に拘束がかけられる。

大人2人がかりで押さえられたあたしがかなうはずもなく、しばらく暴れたのち諦めて力を抜く。

「ふう、やっと静かになったか」

と、彼らがどいた隙に、あたしは待つてましたとばかりに最大限に暴れまわった。

「ひゅぶぶぶぶいいいい！！！！！！」

ごろごろ床をのたうちまわって、とりあえず完全に力を抜いていたお兄さんAにアタック！！見事みぞおちにあたしのキックが入り、彼はそのままダウンする。

「おいお前！！」

慌ててBが、二度目の拘束をしようとしたあたしに襲い掛かるけど。

遅い！

あたしは素早くその状態で立ち上がると、思いっきり縛られた両足で飛び蹴りを喰らわせた。

「がぼっ！！」

こちらも見事、頭に命中し、Bはそのまま後ろに倒れ込む。あたしはすかさず頭を膝にくっつけると、飛び蹴りの反動で空中にぶっ飛んだあたしの頭が床にぶつからないよう、なんとか善処する。なんせ受け身が取れない状態なので。

運よく頭から落下せずに済んだけど、その代わり背中からもろにおちて衝撃を全て後ろで受ける羽目になった。

「！？」

鈍い痛みが背中一面に駆け廻る。痛い、痛い痛い、めちゃめちゃ痛い！！！！

けど、どうやら骨は損傷せずに済んだようで、しばらくすると痛み

もおさまって来た。まあ後で青あざにはなりそうだけど、仕方がない。

あたしは一息つくとき起き上がり、改めて周りを見渡した。

かなり広い部屋だ。大体20畳ほどはありそうな部屋。

内装はいたってシンプルで、大きなベッドとソファ、それから本棚があるのみ。後は何も無い。殺風景にもほどがある。

だけど床にはふかふかな絨毯が敷かれているし、その家具も、細部にわたって細かい細工が施されているところからして、良質のものだと見た。

というか。

そもそもここはどこなのか。

時を遡ると、あたしはいつものように自室のベッドに入り熟睡していた。当たり前だ。もう夜も深い時間帯だ。

草木も眠る丑三つ時、ふと目が覚めたのは、何かが侵入してきた気配がしたからだ。

で、気が付けば、あたしは誰かに口をふさがれ、手足を拘束され、とどめにみぞおちにパンチを喰らって気絶した。

それでさっき目が覚めたら、あたしは見知らぬこの部屋にいた訳だ。周囲を見ると、見覚えのない黒づくめの男（というか顔全体が隠れるマスクしてるんだから、見覚えも何もあつたもんじゃない）が2人、あたしの横に立っていたのだ。

おそらく彼らがあたしをこんな状態でどこかに運び出したのは間違いないんだけど…。

正直あたしには全く心当たりがない。あたしはこの街、ベイリンに出てきてまだ半年しか経っていない、天涯孤独の身。そんな短期間の間で恨まれる覚えはとんとない。

とりあえず、ここがあたしの部屋じゃないことは確かなんだけど…。

ま、考えたって仕方ない。まずはこの手かせ足かせ口かせをどけるのが先だ。

何か助けになるものは…と周囲を見渡すと。

「あれ、あたしの刀！」

ベッドの上に見覚えのある色とシルエツト。近づくと、やっぱり。

あたしの大事な刀ちゃんが無造作に置かれているではないか！！

なんでここに、とか、それはこの際どうでもいい。あたしは急いで近づくと、じっとそれを見つめる。刀があるということは、刃さえ出ればこの忌々しい縄を切れると言う訳だ。

ならば簡単。

あたしはくるりとうしろを向くと、ありったけの力を振り絞ってなんとか手を動かすと、柄に触れる。それから留め金を外し、少しだけだけど刃を鞘から出すことに成功した。

よし、いけるぞ。あたしはその刃を自分の手の縄に当て、ゆっくりと上下に動かす。

やがて縄はぷつりという音を立てたかと思うと、するりと手が自由になった。

後はもう簡単。足の縄を刀で切断し、最後に口の猿轡をはずす。

拉致された(2) (前書き)

王子はいじめっ子です。

だってあれだよ、相手の目しか見えない距離って、相当なもんだよ？なんだ、これ、ちよつと照れるじゃないか。ってそんな場合じゃないぞあたし！

「あ、あの」

息もかかる距離だ。恥ずかしいけど勇気を振りしぼって声出すと、あたしの意志が伝わったのかすつと目が離れる。それに伴って視界が広がり、その人の全体像と、今のあたしの状況が把握できた。

今あたしは、鳶色の目をした男にがしりと頭を持たれ、じ

つと見つめられた状態である。

しかもその男、なんとというか、一言で言うと、その、怖い。

いやいや顔がとかじゃなくて、雰囲気。目はなんかいつちやつてるし、どことなく邪悪なオーラが漂っている。どう見ても堅気じゃなくてその筋の人に見えるんだけど。服も髪も真っ黒だから、余計にあつち系に見える。

そんなお方が、

じー、じ つと、じ

つと。

「……………」

何も言わず、無表情のまま、ただ見つめてくる。正直怖い。

「あ、あの」

駄目だ、耐えられない。無言の空気に耐えられなくなり、あたしは沈黙を破ろうと声を出す。すると、今までまったく表情の動かなかった顔が、ピクリと動いた。

そしておもむろにあたしのおでこに手をやると、急に、すごく素敵な笑顔でにっこり笑った。

「!?!」

よくよく見ればこの男、めっちゃめっちゃかっこいいじゃないか。目がいつちゃってるのはともかく、少しクールだけど整った顔立ちだし、そのへんの奴じゃ比べ物にならないほどだ。

何、なに、なんなの!? 思わずあたしは赤面して、男を見つめていた。…のも束の間。

いきなり強烈な勢いででこピンしてきやがった。

「ばし　　ン!!!」

「だああああ!!!!!!」

一瞬であたしの頭は再び星でいっぱいになる、っていうか痛い痛い痛い!!! だってそこ、その場所!!! あたしがさっきドアに思いっきりぶつけた、たんこぶでしかかけの場所だって!!!

しかもあの音、でこピンなんてレベルじゃない! 頭にバズーカ打ちつけられた気分! 思わずあたしは床で頭を押さえながら悶絶する。

なんなのこの男！あんな満面の笑みで無抵抗の人間の傷口に塩塗るような真似するなんて！！！！

意味がわからない！！！！！！

「っ…っちよつとあなた！！！！」

あたしは痛みから若干解放されるや否や、目の前に立つ男に詰め寄る。

「いきなり何するんですか！！めっちゃ痛いんですけど」

すると、その男は慌てる風もなく、あたしをじっと見つめ、やはり笑いを浮かべながら口を開いた。

「ああ、なんせそのたんこぶめがけて渾身の力で指をはじいたからな。痛いのは当たり前だろう」

「いじめっこですか、あなたいい年して！！」

いや、本当に痛かったんだから！！その証拠に、さっきまでは目立たないほどだったのに、今はぶっくり膨れているではないか。だって触ったらぼこっとしてるもん。

「あ、一応お前もちんちくりんの身の上とはいえ、女なんだからもうちっど色気のある声出せよ」

「色気も何もあんな強烈な攻撃喰らってるときにそんな声出せるか！？っていうかちんちくりんは大きなお世話だ！！」

確かにあたしは背も小さいし、胸も、まあ、あれだし、色々あれだけども！！んなもん、あたしのせいじゃないし。放つといてくれ。

あたしはきつと睨みつけるけど、この男は全く堪えないようだ。余裕の表情でかわすと、懐から取り出したタバコに、優雅に火を付けた。

そしておもむろに、床に転がっている覆面野郎ズに目をやった。

「しかしあいつらも軟弱だな。手足縛った女にのされるとは。…こりゃあ意識戻ったら一から鍛えなおしだな」

「簡単に倒れてくれましたけど」

「ふん、あれでも俺の手駒の中では強い方なんだがな」

手駒。と、いうことは。やっぱりこの男はあいつらと同じ仲間、っていうより上司、主人。つまり。

「……あたしをここに連れてきたのは、あなたの指示ですか？」

すると彼はあっさり認めた。

「ああ、そうだ。俺があいつらに命じてお前をここまで運ばせた」

そう言っつて煙を天井に向かって吐きだす。

意味が分からない。どういうこと？あたしはこの男とは面識がない。こんな凶悪なやつ、知り合いにいる訳がない。

ま、分らないことは直接本人に聞くのが早いだろう。

本当はこの男を倒してさっさと外に逃げ出すのがいいんだろうけど。実はさっきから逃げ出す気配を窺ってはいるんだけど、この男、実に隙がない。

こんな一見飄々としてタバコなんて吸ってるのに、だ。ならば時間稼ぎに隙ができるまで、話を聞くのも悪くない。それに、理由もわからないままっていうのは寝覚めが悪い。

「一体、なんの理由があつてですか？」

あたしはそつと、後ろ手に隠した刀の鞘に手をかける。もちろん、いつでも切りかかれるようにだ。

が。男はそこでまた、にやりと笑った。

「んなもん、おお前を試したかったからに決まってるだろう？ テスタロツサ」

「ど、どうしてあたしの名前」

「それから、後ろに隠してる刀で切りかかっても無駄だからな。お前の行動は全てお見通しだ」

「!？」

なんで、それを知ってるの？ そつちからあたしの後ろなんて見えなはずだし、音にも細心の注意を払ってたのに。

「なんで、って顔だな。まったく分かりやすい。他にも？ 色々知ってる。例えば、その刀はお前の亡くなった両親の形見だつてこととか、それが両親の命を救ったとか」

あり得ない。だって、その話を知ってるのは、近所に住む若干ボケが進んでるおばあちゃん他数人だけ。その中にこの男の顔はない。だからそもそも見覚えのない顔だし。じゃあ彼らから話を聞いたつてこと？

いやいや、だからといってここまでされる覚えはない。こうなりゃあ、逃げ出すとかそれよりも、はつきりしとかないといけない。

あたしは隠していた鞘から堂々と刃を抜くと、男の前で構える。ばれてしまった以上隠しとく意味もない。それにここまできたら、隙ができるのを待っとくなんて悠長なこと、言ってもらえない。

「あなた、一体誰なんです？それに試したかったって意味が分からないんですけど」

「いい度胸だな。この俺様に刀を向けるとは」

「いやだから何様だか殿さままだか分かりませんが、知らないって言うてるでしょう」

「へえ、知らない、ねえ。本当に？」

「しつこいですよ。あなたみたいな性悪そうで偉そうな男、一回会ったら忘れるはずありませんし」

「偉そうは余計だ。俺は真正銘偉いからな。なんてったって、この国の王族だ」

「……………は」

王族？この男が？こんな悪役みたいな、タバコすばすば吸ってる人が？

「気付かなくても仕方ねえ。…じゃ、これなら分かるんじゃないかねえの？」

すると男はタバコの火を消すと、一度、顔を下に向けた。今から何が始まるっていうの？あたしはただ、黙ってその様子を見る。

やがてぱっと男が顔をあげた瞬間。

「こんばんは。僕のこと、本当に分からないの？」

あたしはその顔を、その声を聞いた瞬間、建物中が震撼するような声で絶叫した。

拉致された(3)

今にも風にとけそうな繊細で、それでいて柔らかな微笑みをたたえてあたしを見ているお方。

黒い髪が印象的な、国民ならほとんどが知っている程の有名人。

そのくせ病弱だから、滅多に公の場に顔を見せない。

そう、目の前にいたのは、紛れもない本物の、ガルダム国第6王子ゼイル様だったのだ。

彼は虫も殺さぬ優しい微笑みをたたえ、あたしを見ていた。もはやあたしの頭はパンク寸前だ。

「なななななななな、なんで、ゼイル王子?!?!?!?」

「よかった、ちゃんと知っててくれたんだね。僕あんまりみんなの前に出ないから、顔も知られてないんじゃないかって思ってたんだ」

確かにお顔は滅多に拝めない。けどなぜあたしが知ってるかと言うと、美形で有名な王子の肖像画やらなんやらが、国中で売られてポスターとして飾られてたりするから。

あれだけ街中で貼り出されてたら嫌でも目につくし、顔も覚えてしまふというもの。ちなみに密かにあたしもファンだったのだ。

そして笑顔で近寄ってくるのは、紛れもなくゼイル王子だ。さつきまでの凶悪で目つきがいつちゃってた奴の姿はどこにもない。

「あ、あの、その、本当にあなたはゼイル王子、なのですか…??」

？」

こんなことってあるのか？あの、鬼畜オーラ満開の男が、いきなりゼイル王子に早変わりって、いまだに信じられない。イリユージョンでも見せられた気分だ。

むしろ、夢だったんじゃないかって思えてくる。

あたしは思わず王子に駆け寄る。嫌だ、信じたくない！！だって王子は評判通りすごく美形でかつこよくて、優しくて、少し繊細で…って夢持ってたのに！

いや、何かの間違いだよね！？

すると彼は神々しいまでの王族スマイルであたしを見ると笑みを絶やさないうままこう言った。

「ああ、だからそうだって言ってるだろうが。あんまりしつこいとミンチにするぞコレ」

脱兎のごとくあたしは素早く王子から離れる。この男、いや王子、そんな王子の顔でさらりと怖いことをおっしゃる。

…間違いない、このお方は紛れもなくゼイル王子だ。

だけと言われてみれば、パーツは全て同じなのだ。

髪の色、瞳の色、鼻、唇、輪郭も。どうして気が付かなかったんだろう。

それだけ雰囲気がからっと違ってるってことだ。気付かなくても無

理はない、と思う。

というか、なんだこの状況。もうあたしは何がなんだかよくわからなくなってきたぞ。つまり、あたしをさらったのはこのゼイル王子の差し金ってわけだ。

「ということは、ここはもしかしてお城、ですか？」

この人が王子で、調度品とか部屋の感じからして高級感がそこはかとなく漂う辺り、その辺の場所じゃないことは確か。すると王子は首を縦に振った。

「俺の部屋だ」

「……………」

あたしはもう考えるのも邪魔くさくなり、っていうか色々ショックすぎて思わず床にへたり込む。

「それで、結局なんであたしをここに連れて来たんですか？」

とにかく理由を聞かないとい始まらない。

あたしは王子にそう尋ねる。もうどうにでもなれって感じ。何が来ても驚かない自信はある。すると王子はもとの凶悪顔に戻ると、にやりと笑った。

「単刀直入に言う。お前を『狂犬』に引き抜くために、ここまで連れてきた」

麗しの第6王子様

あの、恐怖の誘拐事件からもう1年。

あたしはゼイル王子に言われるがまま、狂犬の一員として日々を過ごしていた。

『狂犬』。

狂犬とは王様から直接指示を受け、秘密裏に王の命に従う、直属の秘密組織だ。

彼らの主な仕事は、警察でも解決できなかった未解決事件や、彼らが踏み込めない範囲まで手を広げ捜査を進めること。

そもそも、警察は事件の解決のために色々調査をするのだが、時折上からの圧力というものがかるらしい。特に大貴族が関わっていたり、王族の者が関係していると事の露呈を恐れたお偉いさん方が、それ以上捜査が進まないようににらみを利かせてくるのだそうだ。

刃向えばその者は潰され、場合によっては存在を消される。だからそれは未解決事件として扱われ、闇に葬られる。

そんな時に現れるのが、狂犬だ。

彼らはあらゆる非合法な手段を使って事件を調査し、秘密裏に関係者たちを始末し事件を解決するという恐るべき集団だという。

その存在は一切が謎に包まれており、本当に存在しているのかも定かではない。ガルダム王国の7不思議として語られる存在なのだ。

ちなみになぜ狂犬と呼ばれるかという点、彼らは手段を選ばず、時に犯罪まがいなことを犯してまで罪を暴く。それも徹底的にだ。彼らの目にかかって逃れたものはなく、その執拗なまでの追いかけてぶりから、絶対に逃げられないもの、という意味で名付けられたらしい。

組織形態、人数、手段、全てが謎。もちろん国王はその存在を否定してるし、誰も見たことがないから表向きには伝説だ。

そんな生きる伝説の現在のボスであるわが主は今、ゼイル王子の仮面をかぶってご婦人を接客中である。

「それにしてもゼイル王子はなんて美しいのかしら！！」

頭をこれでもかかって言うほど、無数の宝石と羽で天井に向かってデコレーションし、顔はしわを埋めるほどの厚塗りの白粉、唇には毒々しい紅色の輪郭を描き、肩の凝りそうなごてごての総レースのピンクドレスを年甲斐もなく見せつける女性。

彼の有名な10大貴族スネイク家の奥方、アパネル様その人である。

彼女は弱弱しい笑顔を見せる、外見は純粹、内面はどろどろまっくらすすまみれのゼイル王子にすっかり骨抜きにされたらしく、愛おしそうな目で彼の頬を撫でた。

「こんなにも美しいのにお身体が弱いだなんて。神様はいたずらだわ。おいたわしいですわゼイル王子」

「そんな、僕なんて…。アパネル様こそ、まぶしいほどの美しさです。その美しさに目が思わずくらんでしまいます」

目がくらむのは事実だ。っていつかあまりに痛々しすぎて直視できないってのが本音だろう。

「こうして夫人が僕のために、わざわざ貴重なお時間を割いてまで見舞いに来て頂いただけでも、僕の体は喜びに胸が震える思いです」
「まあ……！」

子犬のような潤んだ瞳で、下から見つめる王子にやられてしまったのか、もう少女のような表情でぽーっと夫人は見つめる。

あたしの方はというと、あまりの臭い芝居っぷりに直視できず、思わず目を背ける。

だってそうでしょう。誰が腹黒鬼畜王子（顔はいいが）と熟年厚化粧少女趣味貴族との生ぬるいラブシーンを見せられて喜ぶものか。

その間にも2人のラブシーンは進行していた。うん、いや、あたしは何も聞こえない、何も見ていない、絶対に……！

とりあえず、それから10分ほど寒いシーンが続いたようで（あたしはその間ずっと窓の外を見ていた）、ようやく夫人が重い腰をあげた。

「では王子、私はそろそろ参りますわ」

「ええ、名残惜しいですが……。また是非いらしてください。体調が万全でしたら、今度はもっとたくさんお話ししましょう」

そしてとどめとばかりに、王子ははにかむような笑顔でにっこりほほ笑んだ。

夫人はくらりと体をよるめかすと、そのままの状態で部屋から去った。

そして人の気配が完全に消えた次の瞬間。

「まったく、俺は暇じゃねえんだよ」

あたしのもっとも見慣れたゼイル魔王閣下に戻られたご主人様は、苛立たしげにタバコを取り出すと火を付けた。

「病弱な薄幸の美青年の王子の役も、楽じゃねえな」

「そしてそんな見かけ倒しのゼイル王子と往年の女性との愛のシーンを見せられる従者の方も、精神的に楽じゃありませんけど」

「お前は別にいいだろうが。だって だろ？精神的苦痛も肉体的苦痛も全て快樂に変えるっていう…」

「人を勝手にそんなキャラに位置付けないでください！！！」

はあ。なんであたしはこんな男の下についてるんだ？今更ながら謎だ。

麗しの狂犬王子様

ガルダム王国第6王子ゼイルといえば、病弱で儂げ、そして世にも美しい繊細な王子として有名だ。

漆黒の髪はどこか愁いを帯び、鶯色で切れ長の瞳はどことなく哀愁を漂わせ。病気にも負けないその健気さからくる笑顔に、女性たちはみな虜だ。だがその体の弱さゆえ、滅多に国政には顔を見せず、国民の間では麗しの幻影王子ともてはやされている。

が。本来の彼の姿は、こつちなのだ。病弱な第6王子は仮のお姿。裏の顔は最強の名を持つ狂犬のボスだ。

さっきまでの可憐な姿とは一変。纏っていた淡い月光のような儂さは身をひそめ、ドSでニヒルな笑みを浮かべながら愛用のタバコを吸いまくり、凶悪な目つきで鋭く相手を見つめ、徹底的に獲物（犯人）を追い詰める。

そして味方を川に突き落とすことすら厭わない、最凶最悪の魔王みたいな男…。

それがあたしの主、ゼイル王子の本性である。

あの日、ここに連れ去られた私はこのヤニ王子のお眼鏡にかなったらしい。

どうやら、街で出会ったチンピラ達を成敗していた場面をどこぞでたまたま見かけて、で、それからあたしのことを調べ上げて、実際実力をためしてみようということと部下に襲わせて、なんて物騒な事しかけてきたみたいなんだけど。

そのまま私は王子と無理やり雇用契約を結ばされた。

だって断れば国家への反逆者としてみなす、なんて恐ろしいこと言ってくるんだよ、この人！狂犬の秘密を知られた以上、生かしてはおけないって。自分でぺらぺらしゃべってきたくせに！

私もまだ10代で死にたくはないので、この契約を結んだ。

まあこの仕事、さすがは王直属の機関なだけあって、給料は半端なくいい。

王都に来たものの、日雇いの仕事しかなかったから（腕には自信があったのに、女だからってどこも雇ってくれなかったのだ！）、日々の生活の心配をしなくて済むのはありがたいことだけど。

ただ、休みがあんまりとれないのと、王子の侍女として働くっていう精神的苦痛が伴うのはいかなものかと。特に後者。

なんであたしなんだ。もっと他の、可愛い子とかのほうがよくないですか？自分の侍女は、ってこの前聞いたんだけど、ゼイル王子は首を横に振った。

自分に夢持つてる女の子の夢を壊すなんて、僕にはできない…！！なんてほざいてたけど。確かに。

まさかあのゼイル王子がこんな凶悪王子だなんて知った日には、みんなショックで卒倒するんじゃないかなろうか。あたしだって相当ショックだったんだから。

はっきり言って傷ついたあたしの心の慰謝料も払ってほしいぐらい

だよ！このペテン王子め！じとーっと見ていると、視線に気付いた王子が女の子を蕩けさせる極上のスマイルでにっこりほほ笑んだ。

「どうしたのかな、テストロッサ。そんなに僕のこと見つめてきて」「いやいや見つめてないです気のせいです」

うう、やばいと思った時にはもう遅かった。そのうつとりさせる笑顔を一瞬たりとも崩さずに、あたしの方へ歩み寄ってくる。本性を知ってるからこそ、余計に怖い怖い怖い…。

しかも、普段はテストロッサなんて呼びにくいからテイ、って呼ぶのに、ここであえてテストロッサ呼び。正直嫌な予感しかしない。

気付けば壁際に押しやられてた。やば、逃げ道がない。

「あの、なんでこんな近くに來るんですか!？」

「だって、君が何か言いたそうな顔をしていたから。ほら、部下の話をきちんと聞くのも上司としての役目でしょう?」

にしたって近いって！なにこの距離！文字通り目と鼻の先！これが出会う前の王子だったらドキドキするけど、今は別の意味でドキドキだよ！背中に冷や汗が流れる。

「…もしも今、誰かが入ってきてこの場面を見られたら、どうなると思うか?」

急に腰にくるバリトン声で、耳元で囁かれ、恐怖で思わずへたり込みそうになる。

「ひっ!?!」

が、主は許してくれない。がしつと腕を掴むと、壁にあたしの体を固定し、艶やかな笑顔を浮かべた。

「城中に、俺付きの侍女とそういう関係になると知れ渡る。話を聞いた貴族の娘や女たちが、お前にどういつ対応をするか…。想像に難くない」

王子はご自分の人気ぶりをそりやあもうよくご存じだ。間違いない、そうなればあたしは王子に虜になつてる全てのお姉さま方に八づられ…っていつかそれ以上の危険が…！！

だめだ、想像しただけで血の気がよだつ。女の方が陰湿なのだ、嫌がらせの類と言うのは。ただでさえ、ぽつとでのあたしがいきなりゼイル王子の侍女になって、仲間からは冷たい待遇されてるのに、これ以上針のむしろになるのはまっぴらごめんだ。

しかもそういうことになったからと言って、この王子があたしを侍女業務から解放する訳がない。むしろいたぶられたあたしを間近に見ながら楽しむタイプだ。

「で？今お前、何を考えてた」

「……いいえ、王子はとても素晴らしくて素敵だなああああと見惚れておりましたあ！！」

心の中で思うのも許してくれないのかこの王子はあ！！！！

あたしの答えを聞くと、王子は満足気に頷き、ようやくあたしは解放された。

ふう、命拾いした…。

正直、本性丸出しのチンピラ姿よりも、王子の仮面をかぶったキラ
キラスマイルで来られる方が余程心臓に悪い。

狂犬王子の片腕王子（1）

あたしをいたぶって満足したのか、王子は元の悪人顔に戻ると再びタバコに火をつける。

どうでもいいけどこの人、吸いすぎだよ。一日20本はいつてる気がする。

「ところで伯爵に薬を売った黒幕ってまだ見つかってないんですね？」

「ああ、あの変態野郎も、詳しくは知らないらしい。実際に取引したのは下っ端の奴みたいだし、…王様にはああ言ったが、実際のところ時間はかかるだろうよ」

ちなみに、今あたしたち狂犬の抱えている仕事は、『麻薬捜査』。

ガルダム国内では今、これが大流行しているのだ。通称『白い悪魔』。これを摂取すると、なにかが異常に分泌されて、疲れにくくなって寝なくても大丈夫になるらしい。気分もハイになって、その、性的快楽を感じやすくなる。

あまりにもその被害が拡大していて、止めようにも止められない状況。とにかくそれを持ち込んだ黒幕を捕まえないことには被害はおさまらない。

で、調べていった先にあの、変態伯爵の名前が挙がって来たのだ。彼はいわゆる「売人」の方。

伯爵家は借金を抱えていて生活に苦勞していたはずなのに、いつの

まにか綺麗さつぱり完済、それどころか家を増改築して羽振りのいい生活をしてたんだとか。

そのあまりの変貌ぶりを不審に思って調査したら、どうやらどこからか手にした薬を売りさばくことで資金を調達していたと。

でもまあ、と王子は言葉を切ると、

「今リユークに調べさせてるから、もう少し時間がかけられるなら辿れるだろう」

リユーク、とは、狂犬のメンバーで、主に情報収集の方面で活躍している。その能力はピカイチで、ゼイル王子が最も信頼するメンバーの一人だとか。それはそうだろうさ。生まれたときからの付き合いで、お互いにお互いをよく分かりあえてるらしい。実際2人はめっちゃめっちゃ仲がいい。

その時。

扉がノックされる音がした。

「ゼイル、ご機嫌はいかが？」

穏やかなその声に、あたしはすぐに扉を開けに走る。この声は…

果たして。目の前にいたのは、やっぱり予想通りのお方だった。

「テイちゃん、こんにちは」

一寸の曇りもない爽やかな笑顔をあたしに向けたのは、この国の第

7王子。

輝かしい金色の髪と暖かみのあるオレンジの澄んだ瞳、見た人を虜にさせる太陽のような笑顔を浮かべたこの方。

「リユート王子!」

今まさに話に出てきた御仁の姿がそこにはあった。

確かにこの仕事は辛いけど、その中にはちょっとした楽しみと云うか息抜きもあって。

それが、リユート王子に会えるってこと。

彼もこの国ではとても有名なお方。

第7王子リユーク様と言えば、第6王子であるゼイル様と同じぐらい、婦女子たちから人気が高い。

リユーク王子は、例えるなら太陽のような存在。ぱっと周りを明るくさせる笑顔と全てを包んでくれそうなオーラを持っていて、おまけにこれまた美形。

なんだけど、すごく人懐っこくて、大柄な方なのにその言動や仕草が可愛らしい。

ゼイル様が、まさしく黒い狂犬だとしたら、リユーク王子は大型犬。イメージはゴールデンレトリバー。

しかもすごく優しく、お城の侍女や兵士たちにも気さくに声をかけてくださる。もちろん、あたしにも。会話してるとなんか和むんだよね。普段虐げられてるからかもしれないから、余計に。

「これ、よかつたら食べて」

そう言っただけで差し出されたのは、なぜか食べごろ色に染まったみかん。

「えっと、その、どうされたんですか？」

「母さんの実家の庭の木になってたから。おいしそうだし、テイちゃん喜ぶかなあって」

そう言っただけで嬉しそうに笑う王子に、あたしの胸はきゅんとなる。

何この王子、あたしよりも年上だとは思えないぐらい、可愛いんですけど！？

「もちろん嬉しいですよ！！ありがとうございます！！」

あたしは嬉々として受け取ると、なるべく潰れないように注意してポケットにしまう。あとで食べようって。

「おい、俺より先にテイに手土産やるなんて、いい度胸してんなお前」

背後から飛んできたのは、作ってないご主人様の声。もちろんリュート王子は驚かない。長年の付き合いなので、ゼイル王子の本性はずいぶん前からお見通しなのだ。

「そりゃあ可愛い女の子からプレゼントをあげるのが、紳士としては常識でしょう？」

か、可愛いって…！？お世辞だって分かっても、こんな素敵王子に言われたら照れる！！恥ずかしい！！しかもリュート様はゼイル

様と違って裏の性格とか本性とかないから余計に！

「で、俺の分は？」

「ゼイルにはないよ。これはテイちゃんへのお土産なんだから」

そう言うてから、煙をふかしているゼイル王子を見て片眉をひそめる。

「またそんなもの吸って！あんまり吸いすぎると、肺が真っ黒になつて、将来病気になる可能性が高いんだから！何回言つてもゼイルは聞かないよね」

「別にいいだろう。どうせ表向きは俺、病気がちなだし」

「実際はぴんぴんした健康体でしょう？いいかい、君の事を思つて言つてるんだから。」

後で後悔したつて遅いんだし」

「会う度に小言ばかり言いやがって。お前は俺の母親か」

「いいえ、僕は君の弟です」

威張るセリフでもないのに、なぜか胸を張つて誇らしげに答えるリユート様。

さすがのゼイル王子も、第7王子には敵わないらしい。しぶしぶつけたばかりの火を消す羽目になる。

ここには他にも何人もの王子王女の方々がいるんだけど、ここまでゼイル王子が親密な関係を築いているのはリユート様だけだ。

つて、そもそもゼイル様の裏の顔と本性を知つてるのも、リユート様と後は、王様ぐらい。

確かに、ゼイル様が毒気を抜かれるのも分かる。そういった魅力が

リユート様にはあるもんね。

狂犬王子の片腕王子(2)

「あ、みかんはないけど…君へのお土産は、こっち」

そう言って、リユート王子はゼイル様の方へ歩いていく。手にしているのは白い紙。

「さすがの僕も、ちょっと手こずっていてね。黒幕まで辿り着けてはいないんだけど…」

ゼイル王子はそれを受け取ると、険しい顔つきでざっと目を通す。

それにしても、まさかリユーク王子まで狂犬のメンバーだったって、いうのにはびっくりした。その外見からは、そんな凶暴な裏組織に入っているようには見えないから。

でも人のよさそうなこの王子、実はかなりのやり手。

そもそもこの麻薬事件は、国家警察が追っていたヤマだった。捜査するうちにドミンゴ伯爵が絡んでるっていうことは分かったんだけど、相手はお貴族様。やっぱりというべきか、謎の圧力がかって捜査が打ち切りになったそう。

困った国家警察のトップが、その旨を王様に伝えて、あたしたち狂犬の担当になった。

それからあたしたちはその日の午後早速伯爵家に殴りこみ、証拠品を見つけ、彼を尋問。で、今日がその尋問から3日目なんだけど…。

警察も、ドミング伯爵の名前までしか分からなかったというのに、リユート王子、わずか3日で他にも関係してそうな貴族様達の名前を調べ上げた。

今ゼイル王子が手にしているのが、その方々の名前の載ったリスト。横目で盗み見ると、他にも色々な事が書いてあるし。各家の総資産、負債額、それらの返済日、その後の状況など……。

よく短期間で調べられたなってぐらい。しかもリユート王子、狂犬以外にも政務を抱えていてそれなりに忙しいはずなのに、そっちもきちんとかなしつつ、らしいから。

見た目はこんな、おつきいワンちゃんみたいな方なのに、迅速に膨大な仕事量をこなせるのはさすがは狂犬のナンバー2と言うべきか。

「ドミング伯爵の他にも、ソンプルク伯爵にゴードン伯爵、それに名だたる貴族の名前も……。どいつもこいつも、借金で首が回らなくなったやつらばかりだな。これだけの相手を手玉に取るやつらか。どうやら背後の黒幕はかなり大きいものと考えていいだろう」

「それで一番怪しいのは、一番上に名前のあるゴードン伯爵かな。彼のところが、一番初めに借金を完済して羽振りが良くなったみたいだし。それに、ドミング氏もゴードンの紹介で始めたと言っている。他の貴族たちにも尋問をかけてるけど、彼らも同様にゴードンの名前を挙げてる」

「ゴードンか。かなりの大物だな。接触はあったのか？麻薬商人とは」

「3日間付きつきりで尾行してるけどさっぱり」

「ただ、そう言葉を切ると、リユート王子の手には新たな書類の束

が。

あれ、一体どこから出したんだろう。だってさっきまで何も持ってなかったよね？

あたしの心のツッコミをよそに、ゼイル王子は特に何も言わずそれを受け取る。

そうですね、今はそんな話する状況じゃないですもんね。

「それは彼が個人的に親しくしてる、商人の名前。この中に密売の斡旋者がいるはず」

「なるほどな、それならゴードンが麻薬密売貴族の草分け的存在でも納得できる」

…何がるほどなんだろう。2人の中では点と点が線につながってる状況なんだろうけど、あたしは正直意味不明。点と点が空間の中でぽつんと浮いてる。

ゴードン伯爵と仲のいい商人の中に、なんで麻薬密売に関係してる人がいるって分かるの？

それに、それなら伯爵が麻薬密売の貴族の第一人者っていうのも納得できる、って、どういうことですかい???

あたしがいない頭を必死に絞っていると、王子たちの声が飛んできた。

「テイちゃんが、すごく面白い顔になってるね」

「……お前はほんとに顔に出る女だな」

「え、出てます？顔に？」

全く分かりませんって？だって実際分かんないんだもん。

別にあたしが分からなくなたって、狂犬の1、2が分かればそれでいいと思うんだけどさ。

同じ空間にしながら除け者にされてるみたいで悲しい。いや、自分が話についてけないおバカだって認めるのが悔しいだけかもしれないけど。

あたしがそりゃあもう分からないので教えてくださいな目を2人に向けて、一人は頭を抱えた。

はい、そうですよねえ。めんどくさそうな顔を目撃した瞬間から、ゼイル様にお教えいただけるとは期待しておりませんでした。

ので、もう一人の方をじつと見る。この方は先の御仁と違って心が広いので、教えてくれるみたいだ。

わあい、さすがリユート王子。

ゼイル様と血が繋がってるとは思えないほど、お優しい。

リユート王子の解説

「えっと、そうだなあ。まずは、ゴードン伯爵は知ってる？」

初歩的な御質問。

答えはイエス。もちろん知ってますとも。

ゴードン伯爵家は、ガルダム王国の10大貴族の一つ。
建国当初からの歴史をもつ、非常に尊きご貴族様だ。

「最近そのゴードン家が、没落するかもって噂があっただけど」

それも知ってる。もちろんただの噂。事業に失敗して、多額の負債を抱えたらしい。屋敷も土地も、全て売り払わないといけないかも、と伯爵家のご婦人が嘆いていたとかいないとか。

「ところがある時を境に、噂がぴたりと止まった。代わりに聞こえてきたのは、どうやら伯爵家のある事業が成功して、一財を築いたらしいという話」

「それが、王子たちの中では麻薬密売だと？」

「うん、そう。伯爵も、事業の内容をはっきりとは言わなかったし、流行り出した時期も同時期だからつじつまは合う」

ただ、と、そこでリユート王子は言葉を言いあぐねた様子で困ったような表情をしてみせた。

こくりと首をかしげた様子が可愛らしい。

…つていかんいかん。今は大事な説明を受けている最中。しっかりと聞くことに集中しないとあたし！

「何か問題があるんですか？」

「…伯爵家は10大貴族つて言ったでしょう？彼らは貴族の中でも特に貴族らしい体質なんだ。金儲けは好きだけど、性格は極めて慎重。危ない橋は極力渡らない。はっきりとした見返りが無い限り。そんな貴族体質のゴードン氏が、一体どうして危ない橋を渡ろうと思ったのか。そこが引つかかってね」

「借金を返すため、では弱いんですか？」

「調べてみたら、確かに負債は抱えてたけど、大した額じゃなかった。多少は色々手放さないといけなかったにしろ、ね」

うーん。そっか。

もし麻薬密売がばれたら、ゴードンの名前は地に落ちる。

今までこの国で築き上げてきた全てが無に帰る。だったらそこまで危険を冒さなくても、借金は返せるのなら別にそんなものに手を出さない方が安全。

「ここまでは分かる？」

「はい、分かります先生！！」

小さい子に聞くように尋ねてきた王子に、あたしは理解してることを示すべく元気よく返事してみた。

するとリユート先生はにっこり。

「それじゃあテイちゃんに問題。そんな慎重気質の伯爵が、もし麻薬に手を出すとしたら、どんな理由が考えられると思う？」

うーんと、見返りが期待できなければ危ないことはしたくない、でもお金儲けは好き。

つまり、見返りさえきっちりしてれば危険でもお金儲けに手は出す？

「麻薬の密売をすると、確実にきちんとお金が入ってくると分かればやるってことですか？」

「うん、その通り。ここまで分かれば次の説明で分かるかな？ゴードン伯爵といえば、貴族の中でも生粋の貴族だよ。だから、いきなり見ず知らずの人に『麻薬売ってお金儲けしませんか？』なんて言われても手を出さないと思うんだ。慎重な性格だもん。でも、逆にすごく顔見知りで、麻薬密売のうまいやり方を知ってる人間に勧められたらどうなると思う？」

よく知る人物。

…あたしに置き換えてみよう。

例えばあたしがお金に困ってて、何か仕事を探してた時、知らない人にいきなり『短期間高収入』のバイトを勧められたのと、リュート王子に『短期間高収入』のバイトを勧められたのと。

前者は絶対引く。怪しいし、危険な気がするもん！でももしも後者なら、あたしはあまり迷わず選ぶと思う。だって信頼してる人がそう言うなら、きっと大丈夫だって考えても…あっ！そっか、そういうこと！？

「知り合いなら全然ありです！！」

「そっだよ。僕らもそう考えたから、ゴードンの知り合いの中に、

そういうルートに詳しくそんな人間を調べたんだ。それならおそらく商人に絞られるんじゃないかと。それでピックアップした結果、怪しげな商人が3組ほど出てきたっていうこと」

なるほど……。で、先のゼイル王子の言葉につながる訳か。

「分かりました」

「うん、テイちゃん偉いぞ」

そう満足気に頷くと、王子はあたしの頭をよしよしと撫でてくれた。なんか本当に幼子みたいで恥ずかしい気がするけど、妙に満ち足りた気持ちになるからいいか。

進展への一筋の光

すると今まではすっかり蚊帳の外に自分から行つてた主が、撫でてもらつてる傍からあたしの頭をべしんと叩いた。

「お前脳みそつまつてんのか？軽くていい音出しやがって」

「んあ、痛い…。っていうかあたしは普通です！全然伯爵の状況とかその他もろもろ知らないのに、いきなり分かる方が無理あります！それに説明聞いたらあたしだって分かるんですから！別にそこまでおバカじゃありませんよーだ」

「開き直りやがって…。おいリユート、こいつをあんまり甘やかすなよ」

「いいじゃないかゼイル。君が120%鞭な分、誰かが代わりに飴をあげないと」

そうだよその通りだよ！あたしだって優しくされたお年頃なんだから！

リユート王子の言葉に、心当たりがあるのか、ゼイル様はなんとも言えない様子でちつと舌打ちをすると、部屋のソファに戻り、八つ当たり気味に手にした書類に火をつけ、一瞬で灰に変える。

もちろん本当に感情の赴くままそんなことをした訳ではなく、文字にして残しておくことは危険、ということらしい。

「それでどの商人が関わつてるのかは分からなかったのか」

「うん、ごめん。時間をかければ分かるとは思つけど…」

そうだ、まだ3日だ。

だけど、もう3日。

あたしたち狂犬が関わった事件は、ほとんどが凶悪なものばかり。放っておいたらますます事態は悪くなる。だからいつも解決までは、長くても1週間。

今回の事件だってそう。

時間をかければますます麻薬汚染は広がっていく。

悲しそうな目でしゅんとしたリユート王子を見て、あたしは思わず、耳をしゅんとさせたワンちゃんを思い出した。

う　　、めっちゃ撫でたい！さっきみたいに頭を撫でられるのもいいけど、やっぱりあたしの中でリユート王子は撫でたい派。

だけどリユート王子は再びきつと姿勢を正すと、やや明るい口調で答えた。

「ただ一つ朗報が。ゴードン伯爵んだけど、最近荒稼ぎしたお金であるところに頻繁に通ってるんだ」

「あるところ？」

ゼイル王子の言葉に、こくりと頷くリユート様。

「花街の売れっ子、ラピス嬢に、どうやら相当貢いでいるらしい」

その瞬間、もともと明るくないゼイル王子の瞳が、若干ほの暗いに染められた、気がする。

ただどあたしはおなじみのその名前に、すっかりテンションが上がってしまった。

「ラピス様ですか！？あの？」

「そうだよ、君たちのよく知るラピス・ミーヤン。彼女なら、何か聞いているかもしれないだろう？その商人に関する情報をさ」

それって、もしかしてもしかしなくても大きな進展が見えるんじゃないだろうか???

期待に満ちた目でゼイル王子を見つめると、やっぱり気のせいじゃない。主はとても嫌そう。

まあ分かりますけど。だってこの2人、なぜか仲が悪いし。

でもそんなこと言ってる場合ではないのは、ゼイル王子自身が一番よくお分かりのはず。

はあっとメガトン級の重たいため息をつく、主は重たい腰を上げるかのようにゆっくりと立ち上がる。

「それじゃあそっちは俺がなんとかする」

「分かった。じゃあ僕は他の貴族たちについてももう少し調べてみるよ」

「頼む」

それからやっぱりテンションの上がない声で、主があたしの名を呼んだ。

「テイ」

はいはいなんでしょうか、マイマスター。

ルンルン気分であたしが駆け寄ると、王子はいきなりほっぺたをつねってきた。

「ひゃひゅひゅんひえひゅひゃ」

何するんですか っって言つたつもりだけど、言えてないし。いや本当は何するんだこの人！！

「お前が嬉しそうなのがいらっとしてな」

それ、完全に八つ当たりじゃないですか！？

それから途端にぱつと手を離すと、嫌々オーラ全開にしながらも、出かける用意をあたしに命じたのだった。

花街の売れっ子（1）

王都ベイリンの東側。

街の北側に構えるお城からは、歩いて割と目と鼻の先に、その場所はあった。

まだ昼間だっというのに、色気っというか、18禁的なオーラをむんむんと発生させているその場所は、『花街』と呼ばれる特殊な空間だ。

ようは、男たちが若くて綺麗なお姉ちゃんたちをお金で買って、めくるめく官能の世界を体感する大人のアドベンチャーワールド。

そして我が主は、その区画内にあるいくつかの建物には見向きもせず、目当ての場所へとまっすぐ突き進んでいく。

ええ、うちのご主人様はもちろん、お金でお姉さま方を買う、なんてことをしなくてもおモテになれるのですが、それでもよく、ここにいる一人のお方に会いに来ているのだ。もちろん名目は、情報収集・調査のため。

やがて辿り着いたのは、花街の中でもひと際存在感を放つ、高級感あふれる一軒のお店。

ゼイル王子は慣れた様子で、臆することなく中へ入っていく。

ちなみに、今の王子は完璧に『ゼイル王子仕様』を封印し、素のままの凶悪オーラ全開。だもんだから、不思議な事に堂々と素顔をさ

らしているにも関わらず、街を歩く人、誰一人この人がゼイル王子だと分らない。

それにしても、ゼイル王子は王子服を脱いで兵士の服に着替えると顔を隠すことなく堂々と部屋から出て、そのままお城の正門から出ていくんだもんなあ。

なんで誰も気づかないのってくらい。

…まああたしも初めて会った時全く気が付かなかったから人のこと、言えませんが。

今は中に入ると営業時間外なので、当然、お客は誰もいない。代わりにいたのは、入口に飾ってあった壺を熱心に磨く女の子。

「あ、テイさんいらっしやい」

あたしに気付くと、女の子は満面の笑みを浮かべて出迎えてくれた。

花街は、もちろん男の人が来る街。だけどあたしはこうしていつもゼイル様のお付きよろしくここにも出入りするので、ここで働く人たちとはすっかり顔なじみ。

彼女はスーザンと言って、幼いころからここで働いている少女。あたしよりも年下で、あどけないけどなんか無性に可愛い。

「今日も相変わらず早いですね、ご主人様は」

「いつもごめんなさい、営業時間外だっというのに」

「いいんですよ！ジーシル様はうちの上お得意様だから」

もちろん名前は偽名。

街での王子は、ジージル。ベイリンでも有数の商人の息子で、お金持ちのボンボン、っていう設定。

「ラピス様は今起きられたところですから、準備までもう少し御時間かかるかと」

ここが機能するのは、日が暮れてから明け方まで。売れっ子になったらそれはもう毎日、初めから終わりまで引つ張りだから、こんな昼過ぎに起きるのも不思議じゃない。

ちらりと主の方を見ると、待合室の白いソファにどっかりと座りこんで本日9本目の一服中。

…麻薬依存も恐ろしいけど、あの人のニコチン中毒の方があたしは心配だ。

花街、って初めて聞いた時、田舎から出てきたあたしは正直もつとおどろおどろしいところだと思っていた。だけど意外にもそんなこととはなくて。

お店にもピンからキリまであるので何とも言えないんだけど、少なくともこの一画は別格。

相手をするのが、どこぞの貴族やら大商人やら、異国の王子とかなので、ここで働く女の人たちは、様々な教養と芸を叩きこまれる。

運が良ければお金持ちの人と結婚できる可能性もあるので、自ら志願する者も多いんだとか。なり手はある程度教養と知識を身につけ

た、平民以上の出の女の人たち。

もちろん生まれ持った美貌も素晴らしく、気品と高潔を持った人が
すごく多いのも特徴。

そしてそんな花街の女たちのトップに君臨するのが、今日のお目当
ての人物、ラピス・ミーヤン様。

お相手を務めるのは、名だたる大貴族、王族、金持ちの面々。

彼女を指名しようものなら、一夜にして散在するほどの額だ。それ
でも男たちは彼女の元へ通う。

「ご用意ができました。どうぞこちらへ」

やがて奥から現れたのは、60過ぎの上品な淑女。質のいい淡い黄
色の布地で作られた、シンプルなドレスを身に纏っている。

昔は一斉を風靡したって言われるほどの、花街では伝説の女主人だ。
年をとってなお、その美貌は衰えていない。

…あたしなんかより、よっぽど色気もあるし。

彼女に続くゼイル王子の後ろに、あたしも慌てて従った。

花街の売れっ子(2)

いくつかの部屋の前を通り抜け、やがて見えてきたのは上へと続く螺旋の階段。

太陽の光がさんさんと差し込む中、あたしたちはひたすら上を目指す。

結構な長さだった。

いっつも思っただけど、なんでこんなに長いんだってくらい、とにかく長い。

それだけしんどい思いをしてようやく売れっ子のラピス嬢にお目にかかれるって訳だ。

ようやく昇りきった先にあっただのは、大きな真っ白な両開きの扉。

女主人がその前に立つと、控え目に扉を叩いた。

「ジージル様がお見えです」

すると中から、艶めいた女の声が響いた。

「どうぞお入りになって」

その声と同時に、女主人が扉を開いた。

ギギーっていう木のきしむ音と同時にゆっくりと開かれた先には、果てしなく広い部屋。

王子は開かれた扉から、中へと足を進める。もちろんあたしも後に続いた。

「じゅっくり」

女主人の言葉と共に、静かに扉が閉められた。

中は外から見ていた以上に広く、どこぞの貴族のお嬢様のお部屋だっというても遜色がないくらい立派な物。

色は白で統一されていて、落ち着いた雰囲気。しかもなんだか部屋全体が、そこはかとなく甘くていい香りがする。

さて、あたしたちのお目当てのお方は、目の前の天蓋付きお姫様ベツドの前で優雅に立っていた。

その美しさといったら!!!

瑠璃色の艶やかな髪を無造作に胸元に垂らし、艶然と、魅惑的な表情でこちらを見つめている。

気だるげな雰囲気かわせ、緩く体に纏わせた白のドレスは、彼女の体の曲線美を惜しみなく露わにしている。

猫を連想させるやや釣り上りの瞳であたしたちの姿を見やると、彼女是一般の男たちがいくら積んでも見られない、痺れるような笑顔を向けた。

「テストロツサ」

「ラピス様！」

あたしは別に女好き、とか、そう言う趣味はないんだけど。ラピス

様は別。

だって、ゼイル様やリユート様とはまた別格の美しさだもん！！

初めて会った時は、同じ女としてあまりにも違いすぎて（っっていうかむしろ生物として違つとさえ思う）、近づくのも恐れ多かつた。けどしゃべってみたらすごく優しく、あたしはあっという間に慕う様になつたのだ。

近づくつと、部屋でしているのと同じいい香りが彼女からもする。

ああ、いい匂いすぎて頭がくらくらする…。

「会いたかつたわ、テストロツサ」

そしてあるうことが、ラピスお姉様はあたしのことをぎゅつと抱きしめた。

あたしよりも背の高い姉様のふくよかな胸が、頭にちょうど当たつて…。

男たち誰もが憧れる花街一の美女の胸に顔をうずめるっていう行為も、あたしからしたらいつものことだ。

「すみません、仕事が忙しくて…」

なんせあたしの仕事は侍女兼狂犬ですから。

王子の侍女は1日中、合間に狂犬のお仕事が入るもんで。だもんだから、歩いてこられる距離でもなかなか顔が出せないのだ。

するとラピス様は、今度は自分の顔にあたしの顔をぐつと引き寄せた。

お、眼がでかい。しかも睫毛ながあい。
女のあたしが思わず見惚れちゃうほどの美貌を惜しげもなく見せつけられて、なんかあたしの心臓がやばいぞ。
鼓動が速くなる、痛いくらいに。

「てつきり私のことなんて、忘れちゃったのかと思ったわ」

「そ、そんなこと、あり得ませんから!!」

「おい、いい加減テイから離れる、この女狐が」

つと。ここで不機嫌な声が乱入する。
もちろん誰かは分かりきってるけど。

ラピス様はあたしから体を離すと、今、初めて目にしたかのようにゼイル様の方を一瞥する。
まるで虫けらを見るような蔑んだ目。

「あら、いたの」

「最初からな」

急激に、部屋の温度が下がった気が…いや、気のせいじゃない。なんか、2人の中でバチバチ火花が散ってる。
そのくせ部屋は凍りついたかのように、寒い。

「じゃあテストロッサを置いて、さっさとお帰りなさい。さようなら。御苦労さま」

「いい度胸じゃねえか。この俺の存在を無視するとは」

「仕方ないじゃない。嫌いなんだからあなた」

「それはお生憎様。俺もお前が気に入くわねえ」

……いつものこと、なんだけど。

この2人、仲が悪い。もう究極的に。

2人とも笑顔のはずなのに、その笑顔が怖いつていう……。

間に挟まれたあたしは、素早く部屋の隅に移動……しようとするも、ラピス様に手を引かれ、再び彼女の腕の中に。

「かわいそうに。こんなに愛らしいこの子を、休みがないぐらいに酷使するなんて。あなた最低ね」

「俺の従者をどう扱おうが、俺の勝手だろうが」

「そういう男の醜い独占欲、吐き気がするわ」

「勝手に吐いとけ」

「……ねえ、テストロツサ。あんな男の下で働くのなんてやめて、私のところに来ない？お休みだってたくさんあるし、可愛がってあげるわよ」

そう言いながら、吐息交じりの口調であたしをじっと見つめる。

「うっ……！？」

いや、確かにラピス様は好きだ。あんな腐れ王子の下で酷使されるよりはずっとましだろうし。

けど、けれどもだ！！

なんかラピス様の下にいたら、あたしはもうこっちの世界に戻ってこられないような気がするんだけど！

こう、花街で就職ってことは、将来的にあたし、あんなことやらんななことするの！？

この、洗濯板みたいな体で？いやいや、自分が例えぼんきゅっぼんでも、それは嫌だ！

それに…なんだろう、あたしを見つめるラピス様の顔が、心なしか恍惚として…ちょ、そんな、いきなり腰を触られてるんですけど…!!

いつもスキンシップは激しめだけど、今日は特に過激…!!

うわ　　って目を白黒してたら、今度はぐっと体を後ろに持つてかれた。んで、そのまま部屋の端に叩きつけられた。

「んぎゃっ?!?!?」

「…おい、お前自分の主人の前で、簡単に誘惑されそうになってんじゃねえぞ」

だからって、そのまま床に投げ飛ばすか、普通!? いや、普通なんて言葉、もとよりこのお方には通用しないんだっけ。

あ、お尻うつた。絶対青くなるパターンだよこれ。

「お前は罰として、あとでたっぷりお仕置きしてやる」

にやりと、口の端をあげて言い放った台詞に、あたしは体を震わせ

ぎくっ?!?!?!?お、し、お、き…ですか!? まさかあれ? あれするんですか!?!?

花街の売れっ子(3)

「それで？今日は何の用かしら？」

恐怖でぶるぶる震えているあたしの横にラピス様がやってきて、あやすように頭を撫でてくれた。あー、やっぱりラピス様の方がいい。

「もちろん、狂犬がらみだ」

そう言うと、ゼイル様はタバコを取り出そうとして…素早くラピス様に叩き落とされた。

「禁煙、だから。この部屋」

一瞬じろりと王子は睨みつけたけど、何も言わず、黙って床に落ちたそれを懐にしまう。

ちなみにラピス様。

この男が実は第6王子だったことも、王直属の秘密組織、狂犬のリーダーだってことも全て知ってる。

かといって、彼女は狂犬のメンバーじゃない。

あたしたちが主にしょっぴくのは、いわゆるお金持ちと呼ばれるブルジョワ層。そんな裕福な相手をしたたま手玉に取ってるラピス様のもたらす情報は、あたしたちの捜査に非常に重要なもの。

そんな訳でこの2人、あたしが狂犬に入る前から情報のやり取りをしているんだそう。ちなみに昔から険悪らしい。

王子いわく、魂から相性が合わない。

それでも彼女の協力は不可欠なので、こうして出向いていると。ラピス様の方も王子は大っ嫌いだけど協力は惜しまないと言う。色々謎が多い関係だ。

「狂犬がらみね。ま、あなたのような野蛮人がわざわざここに来る時なんて、それぐらいしか用事はないでしょうから。それで、何を聞きたいのかしら？」

「巷ではやってる白い悪魔、知ってるか？」

「もちろん。この館でもそれを使った女の子がいてこの前死んだわ」「それを主に売りさばいているのが、金に困った貴族達らしい。…最近ここに出入りしているゴードン侯爵もその一人だが、何か聞いてないか？」

するとラピス様はしばし考えるように眉間にしわを寄せる。悩む姿も色っぽいか、綺麗な人は何をしててもなんでもありだ。

やがて思い出したかのようにぽんと手を叩いた。

「ああ、あの顔がギトギトした冴えない男ね。確かに最近をよくいらっしゃってるわ」

「そう、その脂ぎったガマガエルみたいなおっさんだ」

「あの男が白い悪魔を売りさばいているかもしれない、ということ？」

「かも、じゃない。確定だ。リユート調べだから間違いない」

「そうねえ……」

そういうと、再び思案顔に戻られるラピス様。

王子いわく、人間は、その、ベッドの中が一番素直になる馬鹿な生

き物なんだと。だから、男たちがべらべら秘密をラピス様の前で話すことは意外に多いんだとか。

だけど、ラピス様は首をふりふり横に振った。

「残念だけど私は何も聞いてないわ。だってあの人、あんまりにも生理的に受け付けられないから、いつも適当に薬盛って、朝まで床に転がしとくから」

「えっ!？」

あたしが思わず声を上げると、ラピス様は違うわよ、と前置きすると、

「ああ、勿論薬は睡眠薬のことよ。そっちではなくて」

いやいや、そこに反応したんじゃない!? いやそっちも十分気になっただけ。

それは果たしていいのか？

でも、ラピス様ほどのクラスになると、それもありって思えてくる。うん、美人は何をしても許されるって思えるからすごいよね。

「そうか」

ゼイル王子は特にラピス様の返答に何もリアクションせず、それだけ答える。

その表情からは何も読み取れないけど、おそらく心の中では少し落胆してるはず。

当てが外れてしまった以上リユーク様調べが頼みの綱になる。けどそれぞれ、時間がかかりそうだって言ってた。こっちとしては、そ

れでも一刻も早く黒幕を捕まえたい。

うーん、あと手段として考えられるのは、とにかく怪しいお貴族様達の動向を監視する。それも他の狂犬のメンバーがやってるらしいんだけど、なかなか尻尾がつかめないとか。

花街の売れっ子(4)

あたしは唇をぎゅと噛む。

こういう時、役に立てない自分が悔しい。あたしにできるのは武力行使だけ。

頭もそんなよくないし、情報収集なんてもつてのほか。

と。

黙ってあたしたちを見ていたラピス様が、ふっと口を開いた。

「今夜、おそらくあの男が来ると思う。その時に聞きだすことぐら
いはできるわよ?」

「え」

それってつまり、ラピス様が生理的嫌悪感を発揮する男と無理やり
……ってこと!?!?! いやいやいやいや、それはその、いくらラピ
ス様のお仕事がそういう男たちへの夢売り業だとしても、それはど
うなの!?! いくらなんでも…

「あなた、思っていることがそのまま顔に出るのね。ふふ、いいの
よ。可愛いあなたのためだもの。テストロツサが困る姿なんて、見
たくないわ」

そして最後に、断じてゼイルを助けるためではないから、と強く付
け加えた。

「で、私は何を聞き出せばいいのかしら」

「伯爵がどいつと取引してブツを手に入れてるか。それが知りたい。俺たちの予想じゃ、他国と取引のある商人だ」

「いいわ、任せておいて。だけど…」

そこでラピス様は言葉を切ると、潤んだ瞳で私を見つめる。

「もちろん、ただって訳にはいかないけど」

そう言うと、またまたあたしの側にやってきて、くすりと笑う。少女のような無垢で、喜びに満ちあふれた表情。

「いつも報酬やってるだろうが、情報を提供してもらおう代わりに」「ええ、そうね。だけど今回は違うわ。嫌で仕方がない男と、一晩ベッドの上で共にするのよ？いつもと同じじゃ割に合わないわ」

えっと、つまり、いつもは既に知ってることを教えてくれるからいいけど、今回は情報を引き出すために協力するんだから上乘せして、ってことだよな？

にしても、一体いつの間に渡してたんだろう、報酬。おそらくお金だと思っただけど、そんな素振り、一緒にいるときは見なかったのになあ。

なあんて考えてると、なんとなく、視線を感じてそっちに目をやる

と。

ラピス様が、じつとあたしの顔をご覧になられてて。

後ろの方で、苦い顔をしてゼイル様があたしを見ていて。

「あれ？」

二人から視線を注がれ混乱していると、ラピス様がするりとあたしの頬を撫でた。白い指がつつたう仕草に、思わずあたしはぞくつとする。

え、心なしか、ラピス様の目が怖いんですけどもっ!? なにこれ、
どどういう状況!?

まさかあたし、狙われてる

!?!?

と思ったのも束の間。なぜかあたしは首根っこを掴まれて、そのまま宙に浮いた態勢で扉の方へ連れて行かれる。んで、そのままぱいっと廊下に捨てられた。

「んな!？」

抗議しようと思えば、その男はあたしの方を険しい目つきで見ると、ため息まじりで言葉を投げかけた。

「1時間で戻る。下で待ってる」

そして目の前で扉はがちゃりと閉められた。おまけにご丁寧に鍵までしつかりと。

「……………」

ん、ん?んん???

1. ラピス様は、協力する見返りを要求した
2. 部屋にはゼイル王子が残って、あたしは追い出された
3. 王子は1時間で戻ると言った

- 4 ・そしてカギのかかった部屋で2人つきり
- 5 ・ここは花街である

まさか。。。

しんとした廊下に聞こえてくる、衣ずれの音。

「……………」

と、と、とりあえず、ここにいつまでもいてはいけない気がする。
あたしはなんとなく本能で察すると、急いで階段を駆け降りた。

ラピス嬢とゼイル王子

本当に、この男はいけ好かない。何が気に食わないかと言われれば、その存在全てが気に入らない。

ベッドに横たわったまま隣を見ると、乱れた髪をかき上げながら、男が苛立たしげに手にしたタバコをくるくる回している。私はこの部屋でタバコを吸われるのが嫌。だからなんだろうけど。

この男とは、もう長い関係だ。私がここにやって来てから、かれこれ10年来の付き合い。出会ったころはお互いまだ子供で、それでも第一印象から互いに気に食わなかった。

ここにくる子たちは、あわよくばお金持ちの男を捕まえて……って思う子がほとんど。教養や礼儀も厳しくしつけられるから、花嫁修行の一環として考える子も少なくない。

でも私は違う。

私が好きなのは、女の子。まだ女としての蕾が開く前の、あの初々しい感じ。羞恥で顔を赤らめて、それでも襲う快感の波に抗えず……たまらない。

だから、入って来たばかりの女の子たちのつまみ食いが私の趣味。

今の一番のお気に入り、あの、テストロツサ。

小動物みたいな仕草と常に表情がころころ変わる様は、見ていて飽きない。こんな凶悪男の元でも、めげずにいる辺り、根性もあるんだろう。それに……あの子に似てるもの。

私がかつて、人生を懸けて愛した、可愛い可愛い女の子。

そんな子を自分の手で…そう考えると、胸が熱くなる。

だけど、それをこの男は許さない。

私達がお互いにお互いを嫌悪する理由。

それはおそらく、同族嫌悪。

「頼んだぞ、ラピス」

「あなたに頼まれるまでもないわ」

本当はお願いを聞く代わりにテストタロツサに相手、して欲しかったの。

この男が身を呈して庇ったから。

いけすかない存在だけど、体の相性はとてもいい。最近、枯れた男たちの精気しか相手にできなかつたから、若い男の精気も十分私的には満足。

「ふふふ、ごちそうさま」

.....
.....
.....

この女とは長い付き合いだ。

初めて出会ったのは、まだ10代も前半。その頃から俺は狂犬として暗躍してたんだが、顔を見た瞬間、この女は全てを見透かしたように笑いながら囁いた。

「素敵な作り笑顔ね」

完璧な王子の仮面を、一瞬で見抜いたのはラピスだけだ。

別に、だから嫌いになったとかそういうことじゃない。

俺とこの女は似てる。

それが一番の要因だ。

だが、その美貌で花街の頂点に上り詰めたラピスは、狂犬にとって実に都合がいい情報収集の道具だ。だから、嫌々ながらも女の元に通った。

俺が狂犬だろうと、王子だろうと、この女には心底どうでもいいらしい。それを口外する心配もない。

情報をねだる代わりに、女は俺自身を要求してきた。もちろん俺もそれに答えた。嫌いな相手だろうが体が反応するのは仕方がない。そういう生き物だから。どうせお互い割りきった関係だ。

ただ、テイが俺の下に就いてからは、そういうのは要求されなくなった。テイがラピスのお眼鏡にかなったらしい。あいつに会わせることが、情報を提供する見返りになった。

まあ今回はさすがに会うだけじゃ済まされなさそうだったから、テイはさっさと退場させたんだが。

「あなたって面白いのね」

ふと、窓際に立ったラピスが、可笑しそうな様子で口にする。

俺は手にしたタバコを回すのをやめ、女に苛立たしげな視線を送る。

「あなたはなんだかんだ言いながらも本当は彼女のことごとくとても大切。だけど同時に、自分の手で壊してしまいたいとも思ってる。矛盾してるわよね」

分かったような口を……そんなことは言わない。女の言った通りだったから。代わりに口に出たのは。

「……お前も俺と同じだろうが」

俺はベッドから抜け出すと、床に落ちてた自分の服に袖を通す。そろそろあいつに指示してた時間だ。

身支度を整え、俺が部屋を出る寸前、女が呼びとめた。

「黒い感情に染まったらだめよ。人は壊れてしまったらもう修復はできない。壊れたらそれは、もう愛していたその人ではなくなる。別にあなたがどうなるうと知ったことではないけど、彼女が壊されるのは見たくないわ」

そう言った女の顔が、少しだけ愁いを帯びてるように見えた。

「……忠告、どうも」

俺はそれだけ答えると、そのまま振り向かずに部屋を出た。

花街の少女

大人って穢れてる…。

あわあわしながら下に戻ると、庭のベンチに座って、ちょうど休憩中だったのかスーザンがお菓子を頬張りながら本を読んでいるのが見えた。

「あへ、ふおーひふあふお??？」

あれ、どうしたの??？多分そう言ってる。あたしはそんなスーザンの横に座ると、ラピス様が、我が主の毒牙にかかっている旨を説明した。確かにその、見返り?的なものを要求したのはラピス様だよ?だけど、こう、なんか!!言葉にできないものがこみあげてくるのさ!

「そんなの、テイさんが来る前からずっとだけど」

けれど、スーザンはなんでもないような顔でそう言ってきた。

「え、そうなの?」

「うん。前からそんな感じだし。…っていつか、私、ここ1年そういうのがなかったっていう方が不思議だよ。てっきり3人でよろしくやってるもんだと」

「いやあああ

っ!!!!」

よろしくって何!!なんもしてない、あたしは一切穢れてないから!!っていつかしょっぱなからそういうハードなのは無理だから!!

全く、あたしよりも年下なはずなのに、なんてこと言っただけの子は。

さすがは将来の花街の女、っていうことが。いやはや遅しい。

「ち、ちなみにスーザンはそういうのは、まま、まだ、よね？」

こんな可憐な乙女が、もうすでに実はあれあれなのか…？おそろおそろ口になると、彼女は花がほころぶように笑った。

「まさか！花街は18にならないとそういうお客様は取れないもの。私はまだ14だから、後4年は修業の身です」

なんかその言葉を聞いて安心する。よかった。

「…でもジージル様のその行動って、テイさんを守ったんじゃない？」

「え、なんで？」

「だってうちのラピス様、実は無類の女の子好きで有名なもの。テイさんなんてもろドストライクよ？」

……まじでか。なんかいつも妙に距離が近いなあとか、うつとりとした目線を感じたりとか、たわわな胸をおしつけていらっしやるなあとか、フェロモンむんむんだなあとか思ってたんだけど、それってそういうこと、だったの、か？

いやいや待てよ。でももしそうだとしても、あのゼイル王子があたしを庇うなんて真似するだろうか？むしろ嫌がるあたしを傍目で見ながらニヤニヤ傍観する方が、ぼくないか？

あ、でも、ラピス様とは仲が悪いから、自分の従者が嫌いな人に黙って従わされるのは見たくなかった、とか？

うーん、考えても分からない。ならいつそ思考は放棄。

結論。なんにせよ、とにかくゼイル王子は汚らわしい。

あたしはそう心の中で締めくくると、目の前のお茶菓子に手を伸ばす。なんやかんやで疲れたので、頭が糖分を欲しているのだ。

「それで1時間は時間つぶさなきゃいけないんだけど、スーザン付き合ってくれない？」

だって先に帰ると絶対に怒られるし、それはイコールお仕置きとして自分に帰ってくる。既にお仕置きは一つ予約済みなので、これ以上の被害は避けたいところ。

するとスーザンは、お店が開くまで休憩だから付き合っただけ、と言ってくれた。

なので、あたしたちはお茶菓子を片手にガールズトークで時間を潰すことにした。

とはいっても、相手は仮にも花街の少女。普通の話で終わるはずもなく。

かなりディープだ。

「例えば手の技だと…」

「他にもこういった体勢で…」

「後は妊娠について…」

…今だ経験のないことなのに、同じく経験のないはずの女の子の口から淡々と紡がれる内容に、あたしは赤面せずにはいられない。

「それで…って、大丈夫？ テイさん顔が真っ赤だけど」

「そりゃあそんな話されたら、刺激が強すぎてこうなるって」

「テイさんって初心なのねえ。ラピス様がお気に入りになるのも分かるわ」

そう言ってくすりと笑う14歳の少女。

いやいや、あたしは普通です。あなたたちが進み過ぎてるんですけど。しかしこのくらいの年頃の子にもうそういう教育を施すなんて、花街は本当に色々とすごい。あたしの想像の範疇を超えている。宇宙だよ、もう。

他にも、情操教育の他に、護身術とか毒薬の耐性作りのために幼いころから訓練してると言う。

って、そうだ、薬といえば。

あたしはさっきラピス様が言っていたことを思い出した。

ここにも、白い悪魔にやられて死んだ子がいるって。

スーザンもこの一員だし、詳しい話が聞けるかな。

「ねえ、スーザン。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

あたしはちょっと真面目な顔になると、じっと彼女の方を見る。

「ここに、白い悪魔と呼ばれてる麻薬で死んだ女の子がいるって話を聞いたんだけど」

その途端、今まで朗らかだった彼女の顔が一気に曇った。

白い悪魔に囚われた女

「あ、あのね、その、さっきたまたまラピス様に聞いて、それで、今この辺りで白い悪魔が流行ってるから、気をつけないといけなくなあっていうか」

沈黙に落ちたスーザンの様子に、あたしは何やらまずいことを聞いたのを肌で感じた。だから慌てて、動揺のあまりその場に立ち上がりながら言い訳みたいなことを並べてただけ。

その瞬間、彼女の瞳からぼろりと涙が零れた。

「!？」

スーザンは泣いていた。

声は出さず、必死に歯を食いしばり、溢れだす大量の涙。

…あたしは大馬鹿者だ。考えてみたら、亡くなったのはここで働く女の。そしてこの場所はスーザンが育った家のようなもの。一緒に住む人たちはみんな家族同然。

それなのにあたしは、無神経にも軽い口調で、仕事の手がかりになればいいと思う反面、興味本位の気持ちで聞いてしまった。

しかも亡くなったのはつい最近。悲しみの心の傷が癒えてると思えないこんな時に。

最低だ、本当に。自分の愚かさに吐き気がする。

だけどそんなこと思ってる場合じゃない。

あたしはスーザンの方に向き直ると、ここで言わなければならない言葉を口にした。

「ごめん、スーザン。あたし無神経だった。スーザンがどんな気持ちになるのかも想像できないで、こんなこと聞くなんて。…本当に、ごめんなさい」

だけど彼女は気丈にも、そこで涙を手で拭い、それでも顔に笑顔を出して首を横に振った。

「いいえ、テイさんは悪くないです。ただちょっと…思い出しちゃっただけで…」

「思い出させて、ごめん」

あたしはそのまま、無言で彼女の横に座る。

後悔と自責の念で押し潰されそうだ。比喩表現じゃなくて本当に潰れてしまえばいいのに！

しばらく、あたしたちは無言だった。

やがて。

風さえなびかない無音の中で、ぽつりと。スーザンが小さな声で語り出した。

「リーラン姉様は、線は細くて今にも折れそうで。でもしつかりとした意志を持ったお方だった。ここにいる幼い女の子たちはみんな、姉様になついていた。もちろん私もその一人だった」

なにかを噛みしめるように、ゆっくりと語るその言葉に、あたしは

黙って耳を傾ける。

「ある日を境に、姉様に変化が見られたの。いつも綺麗なんだけど、なんだか更に磨きがかったみたいで。時々外を見てはため息を漏らしたり。なんだか少女のように笑うし、私気になって聞いてみたの。そしたら姉様、嬉しそうに言った。『好きな人ができたの』って」

その時の笑顔が本当に幸せそうで、スーザンもそれを見ているだけで幸せな気持ちになった。敬愛する姉は、このことは2人の秘密ね、つていたずらっぽく笑いかけると、指切りゲンマンを交わした。2人はどうやらお互いにお互いを好きあつてたみたいで、近いうちここから出て結婚する約束まで交わしていたそうだ。

「だけど」

今までどこか慈しむような声だったのが、突然がらりと変わった。

「急におかしくなったの、姉様。目は虚ろだし、気分の上がり下がりが激しい。突然ハイになったかと思えば、次の瞬間には泣いてたり。それに、もともと細かった体が更に細くなっていったわ。短期間で、異常なくらいに」

見る見る骨と皮だけの姿になったリーランは、それでも営業し続けた。

もとより人気のある彼女だったので、それでもお客はついていった。

「けど、異常は止まらなかった。ううん、もっとひどくなっていった。ある時なんて、髪の毛を振り乱しながら奇声を上げたり、他の人の部屋に乱入してお客の首を絞めたり。あまりにも奇行が激しく

なったから、さすがに女将さんが姉様の営業はやめさせたわ。そして地下にある部屋に、鍵をかけて閉じ込めた」

それはきつと、女将さんにも苦渋の選択だったんだろう。情があふれてるのが目に見える程の人だから。

「それでも姉様は回復しなくて。そのまま地下の部屋で、眠るように亡くなったと聞いたわ」

花街の地下に作られた部屋。それは、ただの部屋じゃないのは知っている。

ここで働く女達が錠を破った時、お客が館でのルールを破った時。地下にある牢に閉じ込め、様々な拷問にかける場所。

陽の当たらない、暗く湿った地下牢で、ひっそりと死んでいったリラン。

きつとリランも、そして同じ花街で働く女たちもみんな、辛かったはず。

誰も望んでいなかった結末。

「後で調べてみたら、それが今裏で密かに回っている、白い悪魔と呼ばれる薬のせいだっていうことが分かったわ。症状も、薬の切れたあとに出る副作用も、噂と同じだったから」

確かに、話を聞く限りおそらく白い悪魔の仕業だと思う。

あれは人間の神経を蝕んで、廃人にしてしまっ、恐ろしい薬。

「姉様は最後まで言わなかったわ。それをどうやって手に入れたの

か。ただずっと、会いたいつて言ってた。あの人に会いたい、会えたらこの苦しみからも解放されて全て解決するのにつて。それで私思い出したの。姉様が私に、私だけに教えてくれた、愛する人の存在を」

全てはそこから狂い出した。なら、姉様をあんなに苦しめたのは、その男のせいだ。

そう思った。

「……それで、その人は一体」

あたしの呟きに、スーザンは怒りと憎しみを込めて答えた。

「ゾイド男爵、きっとあの男が姉様を殺したのよ……っ!」

心配する王子

スーザンが自分の部屋に戻った後も、あたしはしばらくそこで座り込んでいた。頭の中ではさっき聞いた彼女の言葉がぐるぐる回っている。

あの人に会えたら全て解決する。彼女が苦しんでいたのは、おそらく薬が切れたことによる禁断症状からくるものだろう。それが解決するってことは。

もし彼女の話が本当なら、ゾイド男爵がリーランに薬を渡して、麻薬依存させたことになる。リユート王子が持って来た書類をちらりと盗み見た時、男爵の名前はなかったように思うけど…。

実は彼も麻薬犯売人として暗躍している一人ということか？
もしかしたら売人ではなく、買ってる側かもしれないけど。

「…っておい、お前！聞こえてんのか!？」
「うわ！！びっくりした」

思索に耽りすぎてたから、主が声をかけてきたのにも全く気が付かなかった！

見上げると、そこそこに乱れた髪の毛と服を身につけたゼイル王子が、そりゃあもう不機嫌そうに立っているではないか。

…その乱れ具合、やっぱりそういうことですよね。

ラピス様のいい匂いが、ゼイル王子から香ってくるし、そういうあ

れなんですよね、はい、分かっておりますけど。

それにしても、今のゼイル様は特にいらついでいらつしゃるご様子。ちつと舌打ちをすると、あたしの横に乱暴に腰掛け、例のあれを口に啜えた。

あ、そつか。あの部屋禁煙だったっけ。そりゃあフラストレーションもたまるわな。

納得。

こういうご機嫌の時は、君子危うきに近寄らず精神が働くから、あたしはいつもダッシュで逃げ出すんだけど…。さっき聞いた話のせいで、なんかそういう気分にならなかった。

すると王子はまたまた舌打ちすると、さっきつけたばかりの火を消し、あたしの顎を持ちあげると自分の方に向かせた。

あーうー、なんかストレス解消にいたぶられるのかなあ、お得意のでこピン？このまま後ろに投げられる？それとも新技？なんて考えてたら、予想外の行動された。

「……………」

「熱は…ないな」

ごつんと当たるおでこ。あたしとそう変わらない王子の熱が伝わってきて。

いつもと違う行動に、あたしは驚きすぎて声すら出せずに硬直する。

な、な、なに、コレ。ゼイル様があたしの体調を心配して、熱を測

るだあ！？そんなお優しい慈悲深い行動、今までされたことないんですけど????それともこれは、新たないじめの一環??????

ようやくあたしの声が出たのは、王子に解放されてから。

「どう、え、えええ、な」

声は出ても。

動揺しすぎて言葉が出ないんですが。ぱくぱく、空気を求める鯉のよう。絶対今のあたし、間抜け。

「ど、どうし、ちゃったんですか?そんな、あたしの熱を測る、なんて」

ようやく、言葉になったのは、それからまたしばらくして。

「なんだ、俺は自分の従者の体調の心配もしたらいけないのか」

「今までそんな素振り一回も見せたことないくせに、急にされたら驚くに決まってるじゃないですか!」

これは何か企んでるって考えるのが普通だと思う。だって、鬼畜だよ?Sツ気満載だよ?そういう本性を知ってるから、余計に怖い。

あたしが怯えた目で見ていると、王子はやれやれといった感じだめ息をついた。

お願いだからあたしに分かりやすく説明して下さい。

「機嫌が悪い時の俺を見たら、お前絶対に逃げるだろう。なのに今日はそれが分かかってて尚逃げなかった。俺は逃げる獲物を追い詰め

ていたぶるのが好きなんだ。そんな、ウェルカム状態してるやつを虐めても全然楽しくないだろうが」

その発言もどうかと思うけど。なんだ、それ。本気で性格悪くないか？

「…だから、熱がないかどうか測ってみたと？」

「それにさっき俺が声かけたときも、心ここにあらずだったろうが」
ああ、確かにそうだった。いつもなら凶悪オーラにびんびん反応するから、そんなこと絶対はないのに、さっきは本気で耳に入らなかった。気配にも気付けなかったし。

「…で？本当にどこも悪くないのか？」

まさかあたしのことを心配してくれるなんて…。正直あたしのことなんて、サンドバックとかストレス解消用にしか思われてないんじゃないか、って思う時がたまにあったから。

そんなこと言われるとちょっと嬉しいじゃないか。

主が本気で気にかけている表情をしてたので、あたしは元気よく、返事をした。

「大丈夫です！！100%健康体ですから！！」

本当に病気とかじゃなくて。さっき、スーザンの話を聞いて、ちょっと思考の渦に呑みこまれてただけだから。

あたしの返事に満足したのか、王子は安心したように笑った。

その顔が…今まであたしが見たことないような、すごく穏やかな表情で、一瞬ドキツとしたけど。

次の瞬間、あたしは一瞬でその気持ちを後悔した。

「じゃ、例のおしおきにも耐えられるってことだな」

…あ、あれ？あたしが元気だって分かった途端、それですか？

ちよっと、さっきのときめきを返せ、馬鹿王子！！

リンリーの愛した男爵

悩んでても仕方がないので、あたしは王子にさっき聞いた話をした。

ここで亡くなったリンリ、その原因と思われる白い悪魔、そして彼女の愛した男爵が関わってるかもしれない事…。

「ゾイド男爵の名前は、あそこにはなかったですよね？」

確認のためあたしが聞くと、王子は低い声で「ああ」と答えた。

「ゾイド男爵か。貴族の中でも下位の奴だな」

「どんな人が知ってるんですか？」

あたしも全ての貴族を知ってる訳ではないけど、ほとんどの名高い方々は全て頭に入ってる。実際、お城で働いてたら目にする機会も多い。挨拶された時に顔と名前が分からないと困る、ということ、必死に覚えたから。

だけどその名前は、あたしが初めて聞く人だった。位も男爵だから、さっき王子が言った通り貴族の中でも下の方。メジャーじゃないのは間違いない。

「俺もよくは知らない。城にも滅多に出入りしないからな、男爵クラスは」

ただ、と王子は言葉をそこで切る。

「リユートは、貴族全ての中から、金周りに困ってる奴らをピック

アップしてる。そしてそこから急にお金が回り出した貴族を調べ上げて麻薬売買の疑いがある人間を報告してきてるんだが。少なくとも、金銭的に困窮している貴族の名前の中に、ゾイドの名前はなかった」

うーん、調査が上がってこなかった貴族かあ。

って、そもそもその男爵が、本当に麻薬をリーランさんに渡してたって証拠はないんだけど。

けど、彼が関わっている可能性は限りなく高い。

「なににせよ、調べてみる必要はあるな」

確かにそうだ。調べてみないと何も始まらない。それに、男爵の存在がもしかしたらこの一連の黒幕に近づく、重要な糸口、になる、かもしれないし。

「後は、今日ラピスがうまくゴードンから何か有用な証言を聞き出せたら、もう少し進むな」

ラピス様にこんなことお願いするなんてすぐ申し訳ないんだけど……。けどそれがやっぱり黒幕への手がかりになるかもしれないから。

あたしたちはそれを期待するしかない。

「それで、お前がさっき元気がなかったのは、その話をスーザンから聞いたからか」

「あ、はい、まあ」

「なんだ、スーザンを泣かせたから自己嫌悪でもしたのか？」

自己嫌悪……。確かにそれもあつたけど。でも、後悔したって仕方がない。ああやって口に出した以上、取り消せるものじゃないし、彼女に辛い思いをさせてしまったけど、そのお陰で黒幕への糸口につながる可能性だってある。

それに、スーザンは泣いていたけど、話した後、心なしかすつきりした表情をした。きつと、誰かに話したくて、でも誰にも言えなくて、本人も辛かつたんだと思う。同じ花街の人には話しづらかつたんだろう。

そうではなくて。

「……もし話が本当なら、リンリさんは愛する人に麻薬をすすめられて、その人のせいで薬に体と精神を蝕まれて、死んでしまった。男爵がどんな男なのかあたしには全く分からないけど、自分が愛する人に薬を飲ませるなんて、男はどういう気持ちだったんですかね」

彼女はどんな気持ちで死んでいったんだろう。牢の中、薬も切れて、禁断症状に苛まれながら一人。

実は男は遊びだったのかもしれない。遊び半分で、花街の女に薬を与えるという行為。

恋愛ごっこで、でもリンリが本気になって、それで困って薬を与えた。薬が切れたら禁断症状に襲われ、やがて死んでいくのを見越して。

だってもし男が本当にその人を愛していたら、絶対にそんなことはしないんじゃないだろうか。

「テイ、お前のその話は全部憶測だ。実際に男爵が薬を与えたという証拠もない。リンリーが男爵を愛したのとたまたま同時期に、彼女に薬をやった別の人物がいたのかもしれない。結論をあまり先走るな」

「だって」

「それに俺の考えじゃ、男爵は白だ」

「…ゼイル様だって、いつも証拠が上がる前から推測で結論出してるじゃないですか」

「俺はいいんだよ。俺の勘は当たるから」

当然のようにドきっぱり言い切った主に、でもあたしは否定の言葉は言えない。

うん、本当に、なんでそんなことが分かるの、ってぐらい、ゼイル王子は第6感が冴えている。そんな王子が違うってんなら本当に白なのかもしれないけどさ。

でも、あたしは絶対男爵が黒だって思う。そんな偶然、本当にあるの？

すると王子は、まるであたしの心の中を読んでいたかのように。

「ただ、世の中に偶然なんてもんはない。そこで男爵の名前が出てきた以上、その男も何らかの形で関わってる。それが、麻薬を渡した人物っていう枠ではないかもしれないがな」

それから、ゼイル王子はあたしの肩を軽く叩いた。

「まずは男爵と会う。話はそれからだ」

そしてふっと陰った顔を見ると、どこか遠い目をしながらゼイル王

子が口を開いた。

「……さっきのお前の疑問。好きな女に、危険と分かっている薬を与えるかってやつ。俺にはその気持ち、分からなくもない」
「え」

それは王子が鬼畜で人でなしだからです……って軽口叩こうと思ったんだけど、王子があまりにも真剣な表情だったので、あたしは口をつぐんだ。

けど、これ以上は王子も答える気はなさそうだ。この話はもうおしまいとばかりに、王子は席を立つと店の中へと歩いていく。

「とにかく、男爵を調べるのが先だ。用も終わったし、さっさと戻るぞ」

そうだ。そこを調べないと、話は先に進まない。

なんとなく、その時の王子の表情が気になりはしたんだけど、とにかく今はこのヤマを片づけるのが先だ。

あたしたちはそのまま店を出ると、急いでお城へと戻った。

芝生のワンちゃん王子様

はあ、あたし、これでも一応嫁入り前の体なのに、王子はほんっと容赦がない。

傷まみれの自分の体を見ながら、あたしは苦いたため息をついた。

腕や足には、細かい切り傷、打撲の跡。服で隠れて見えないけど、背中やおなか、腰の辺りもずきずきするから、なんらかの痕はついてるんだろう。

顔はさすがに遠慮してもらったみたいだからそれはありがたいんだけど。

広大なお城の庭園の、本当にすみっちょよ。誰からも忘れられてそうなどころにある水場で傷口を洗っていると、見慣れた金色の頭がすぐ近くにあった。

「ずいぶんと派手にやられたね」

苦笑交じりにそう口にしたのは、リユート王子。お日様の光が金の髪にきらきら反射して眩しい。あたしは思わず目を細める。

「これでも昔よりは減りましたがね、傷の数」

「そっか、一年前より強くなった証拠だね」

「まだまだですよ。あの王子、化け物並みの強さですし」

腕には割と自信があったあたし。昔から手になじんでる愛用の黒刀持ったら、その辺の兄ちゃんやおっちゃんなんて敵わない程強いって自負してた。だけど上には上がいるもんで。

そんなあたしの鼻っ柱を、あの王子は見事にへし折ってくれた。あたしを連れてきた男たちには勝てたんで、どうせそれぐらいの強さだろうなんて油断してた。

実は、狂犬に入れ、って言われた時、あたしはささやかながらも抵抗してみたのだ。隙はないけど、たいしたことないって。たかがみんなから守られてる王子、本気出せばちよるいんじゃないかってあたしの期待は見事に裏切られた。瞬殺でしたわ。

それからあたしは、何か粗相したり王子の機嫌を損なうことに、お仕置きと言う名の剣術の訓練をさせられている。 magari なりに狂犬に入った以上、強くなければ困るっていう理由で。

とは言っても、あまりにも王子が強いので、あたしが一方的にやられてるだけだけど。手加減してもらってるって分かってても、この様だもんなあ。

この剣術の訓練、いつ予定に入るか未定なので、あたしは常に鍛えておく必要がある。そうしないと、例え手を抜いてもらってるとはいえ傷が増えるから。

お陰でこの1年で、あたしの腕は大きく成長したと思う。

「それにしても、リユート王子がこんなところにいるなんて珍しいですね」

ここは、庭の本当に端の方にあるぽっかりと空いた空間。周りには整備された薔薇園も噴水もない。あまりにも目立たないから、その存在なんて誰も知らないんじゃないかってくらい穴場。

「ああ、ゼイルに会いたくて。部屋の前にいる兵士に聞いたら、今はテイちゃんの訓練中だって言ってたからここかなと思って」

そう答えると、手にした白い書類の束をひらひらさせた。

これはまさか…。

「もしかして、例のあれですか？」

「うん、そう。他にも分かったことがあったから報告しておこうと思って」

さすがと言うかなんというか。昨日の今日で、よく調べられたなあ。つてくらい、これまた分厚い量がある。

「で、肝心のゼイルはここにはいないの？」

リユート王子が辺りをきよろきよろ見渡すけど、残念ながら人影は見当たらない。それもそのはず。

「王子なら花街のラピス様のところですよ。昨日のゴードン伯爵と、花街で亡くなった女の子の件で」

昨日のスーザンのこともあるし、あたしもついていこうと思ってたのに、王子に止められた。

はっ、まさかラピス様と再びごによごによか！？だからあたしはお邪魔虫だからおいてくのか！？なんて疑いの目で見ていたら、1時間ほどで戻る、と鉄拳付きで言われた。

「だもんで、すぐに戻ってくるとは思っんですけど」

書類を渡すだけならあたしにもできるけど、おそろく話はそれだけじゃないはずだし。

「それじゃあここで待ってどうかな」

そう言うと、王子は芝生の上に、どっこいしょって言いながら座り込んだ。

…いやあ、どっこいしょはちょっとおじさん臭いと思う。まだ20も前半だし。しかもその外見でその掛け声は、どう考えたって似合わない過ぎる。

「お部屋じゃなくてもいいんですか？」

「だってここの方が日当たりがいいし、それにここも気持ちいいよ？」

テイちゃんもこっちにおいでよ、そう手招きすると、王子は寝ころんで大きな伸びをした。ああ、もちろん、大事な書類は風で飛ばされないように、頭の下にひいているけど。

っていいのかいいのか、その書類、一応、超重要書類だと思うんだけど、そんな雑な扱いで。まあいいか。どうせ後で燃やすんだし、見れたらそれで。

それにしても。なんていうか、この光景。すっごく微笑ましい。リユート王子は人懐っこくて優しく、髪も目も暖色系で体も大柄だから、こうして見ると、芝生に大きなワンちゃんが寝っ転がってるように見える。あー、頭とか撫でたい。

そんなこと、一国の王子に勿論言えないから（王子を犬に例えるとか、普通だめだよな）、あたしは感想を心の中にしまいこむ。

水道の水をとめ、軽く体を拭くと、あたしはお言葉に甘えて王子の指し示した横に座る。

おー、確かにこれは寝ころびたくなる感触。さっきもゼイル王子との訓練中にさんざん芝生には転がされたのに、こんなにいい触り心地だなんて気付かなかったよ。

もう肌寒い季節のはずなのに、太陽がさんさんと降り注いでるからそれなりにあったかいし、風もこの季節にしては弱い方。

ふと横を見ると、王子は今にも眠ってしまいそうだ。目がとるとろしてる。

よく見れば、王子の目の下にはうっすら、クマが。

考えてみれば、たった一晚であれだけの量の情報を集めてきた。ってことは、王子は寝る時間を削って、って考えたっておかしくない。実際そうなんだろうし。

でもリユート王子がいつも迅速に確実な情報を持ってきてくれるから、今までの事件も早く対処できたのは確かだ。王子の貢献度は計り知れない。

それに、狂犬の仕事以外にも、王子としての政務も抱えている訳で。負担はかなり大きいはずだ。

そのまま目をつぶってしまった王子を、もちろんあたしは起こすな

んて野暮なことはしない。

にしたって。

あたしはついには寢息を立てて熟睡モードに入ってしまったリユー
ト王子をまじまじと見やる。

なんて無防備な姿なんだ。

こんな素敵な第7王子が、お城の敷地内とはいえ外で、しかもあた
しの横で寝ているなんて。

時折口から洩れる、うーん、とか、あー、とかの声が無性に母性本
能をくすぐられると言うか。立ち位置的にはあたしの中ではお兄さ
んの存在のはずなんだけど、行動とかなんか色々全体的には弟属性。
やば、緊張して来たかも！！あたしの中では恐れ多くもマスコット
的存在だし、別に恋愛感情を抱いてるとかじゃないけど、あのリュ
ート王子が横で寝ているってだけで妙にドキドキする。幸せのよう
なそっじゃないような。

早く目を覚ましてほしいと思いつつ、このまま寝姿を見るのも嬉し
いなんて…ツやばい、あたし、もしかして変態！？

うわぁ、とにかくゼイル王子、早く戻って来てくださあ
い！！

新たな事実（1）

言葉通り、王子は程なく戻って来た。

主は、すっかり夢の中のリュート王子と、隣で顔色を赤く青くさせているあたしを見比べると、呆れたような溜息をつきながらリュート王子を揺さぶった。

「おい、起きろ。早く起きないと、テイの奴に襲われるぞ」

「！？なんてこと言っんですか！」

「鼻息荒くして、寝てるリュートの方見てたじゃねえか」

「そんなことしてな…」

「してない」とは、断言できないかもしれない。だってあたしの中の何かと戦ってたのは事実だし。何もしてはいけないう理性と、こう、ほっぺたとか触ってみたいもっと近くで顔見てみたい頭撫でたい、みたいな本能と。

もちろん耐えましたよ！？無防備な人の、しかも王子様の顔に触るとか、犯罪だから！断腸の思いだったけど。

やがて目をぱちぱちさせると、リュート王子がよつやくお目覚めになられたようだ。

むっくり起き上がって、ゼイル王子の顔を見て、ほわんとした笑みでにっこりした。

「やあゼイル。おはよう」

「おはようじゃねえ。もうすぐ夕方だ」

日が暮れるのは早いもの。さつきまで頭の上にあった太陽は、今は西の彼方でオレンジ色に輝いている。風も…なんだか冷たくなってきた。きつと日の入りが近いからだろう。

思わず体をぶるつと震わすと、それはリユート王子も同じだったみたい。

「寝冷えしたかも」

「そんなところで寝てるからだ。ほら、部屋に帰るぞ。…それから頭の下に引いてたそれ、忘れるなよ」

立ち上がってそのまま中に入ろうとしたリユート王子に、ゼイル様が呆れたように声をかけた。

あーら、本当にすっかり忘れてたみたい。だめじゃないか、王子。

「ごめんごめん、教えてくれてありがとう」

そう答えて可愛らしく謝るリユート王子に、さすがのゼイル様ももう何も言わず、無言だ。

確かりユート王子とは異母兄弟で、若干ゼイル様の方が誕生日が早いけど、年齢も一緒。

なのにこうして並んでいる姿は、しっかり「兄」と「弟」。

普段から取り繕った顔か、険しい狂犬の顔を見せることがほとんどな主だけど、リユート様の前でだけは違うみたい。

表情も穏やかで、肩の力も抜けている。表向きは病弱な王子様として演じ、裏では狂犬とは呼ばれてても、ゼイル様も人の子。リユート

様といる時は自然体で、すごく楽しそう。

…願わくばその感じが、あたしにも向けて頂けたらすごく嬉しいんですが。

少し、なんて贅沢言わない。ひとかけら、ほんの爪の先でいいですからっ！……！

………

ゼイル王子の部屋に集まったあたしたちは、まず先にリユート王子からの報告を受けた。

「あれからまた調べてみたけど、他に麻薬密売に手を染めてる貴族の名前は挙がってこなかったよ」

「尋問かけてる連中はなにか吐いたか？」

すると、リユート様は顔色を曇らせて首を横に振った。

「いくつか新しい証言はとれたけど、大して進展はない」

リユート様に渡された書類にざっと目を通した主は、ため息まじりに前半部分に火をかける。どうやら本当にたいした収穫はなかったみたいだ。

残りの部分、それらがどうやら、昨日あたしが聞いたリンリーの事件に関することらしかった。

「花街の女の子のこと、調べたよ。本名はリンリー・モカナビ。年齢は21。家は中級家庭で、それよりも上の階級との結婚を目論んだ両親に入れられた口だった。けど本人も嫌々、という感じではなかったみたい。この仕事も好きで、誇りを持って働いてたっていう話だよ。性格はおとなしくて真面目。下の子たちの面倒もよく見てたらしい」

それはスーザンも言っていた。みんな彼女に懐いていたって。

「地下に閉じ込められてから彼女、禁断症状がひどくて、あの人が呼んでるの、って叫んで。おそらくそれは、幻聴だと思われるけど。それで、牢から脱出しようとして鉄格子に何度も頭を打ち付けて…亡くなったそうだし」

……スーザンが話してくれた最期と違う。おそらくそのあまりにも悲惨な最期を話せなかったんだと思う。

だから、リンリーはひっそりと亡くなったって。そう、みんなには説明したんだろう。

あたしはその事実には、胸がぎゅつと鷲掴みにされたようか感覚に陥る。ひどい、ひどすぎる。こんなの、あんまりだ…！！彼女をそんな風に変えてしまったのは、死なせてしまったのは白い悪魔の存在。そしてそれを投与したのがおそらく…。

「それで、その、ゾイド男爵なんだけど…」

すると、手元の紙の束に目を通していたゼイル王子が、突然大声をあげた。

「おいおい、どういうことだこれは」

王子がどこの部分を見てそう言ったのか、リユート様は分かったんだろう。硬い面持ちで頷くと、あたしの考えをひっくり返す衝撃の事実を口にした。

「実は男爵、殺されてるんだ。リンリーが亡くなる数週間前に」

「え!？」

殺された!？男爵が!?!？

だって彼はリンリーの恋人で、おそらく麻薬を与えた張本人で、それが既に死んでいる?しかも、ただの死ではなく、何者かに殺された…。

「夜の外出中に、背中を刃物で貫かれ、出血多量で死亡。目撃者はなし。もちろん未だ犯人は捕まらず、か」

ゼイル王子がそこにある情報を読み上げる。

「彼の殺されたその道、住んでいる屋敷から花街までの最短ルートみたい。おそらくリンリー嬢に会いに行く途中に殺された、そう見て間違いないと思うよ」

「ちなみにゾイドは噛んでたのか?麻薬の売人側に」

「いいや、調べてみたけどやっぱりそんな痕跡はなかった。それに彼は、ゴードン伯爵とのつながりもなかったからね。念のため、売人側じゃなくてそれを買った側の可能性もないか調べたけど、それもなかった。ゾイドが白い悪魔を自分に使うこともなかったよ。それから2人の関係なんだけど、本当に恋人同士だった。結婚するのも決まっていたらしい。男爵が周囲にそう言っていたそうだから」

それはつまり、男爵もリンリーと同じように本気、だったってことだよ。つまり2人は真剣に付き合っていた。将来のことも見据えて。

「……それじゃあ、男爵が彼女に麻薬を渡した訳じゃない、ってことですか？」

あたしがそう尋ねると、リユート王子は確信に満ちた瞳できっぱりと言いつつ切った。

「うん、彼は麻薬には関わっていない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5749z/>

狂犬王子にお仕えしています。

2012年1月4日01時47分発行